つないだ手

Gasshow

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

風が吹き荒れる豪雨の日。とある男は傷だらけの小さな小さな少女と出会う。身寄りもなく、頼る宛もない彼女を男は保護し、そして共に暮らし始める。

そんな不思議で、謎だらけの少女は自らをこう名乗るのだった。

『峰理子』と。

これは峰理子が、遠山キンジたちと出会うずっと前の話。

目次

出会い雨 1
つなぎはじめ 16
背伸び 31
日々徒然の変化点 42
ふるさとへ 54
回った車輪 63
今日も雨 76
水も滴る良い女 94
虫とりと駄菓子屋 109
泡沫夏過の二対し乙女 130
九夏一伏 169

出会い雨

道を歩いていると、野良犬や野良猫に遭遇することはよくある。特に夜はそうだ。ゴミ箱を漁っていたり、目の前で横切るのを見たりする。少し違ったものになるが、捨て猫や捨て犬なんかもよく見かける。仕事の帰り道で小動物が中にいるダンボールが目にとまることなど稀ではない。昔から世話焼きと言われてきた俺は、見かける度に家で飼ったり誰か貰ってくれる人を探したりしてしまうのだ。お陰で俺の住居はいつの間にか小さな動物園のようになっている。そんな俺はある日、犬や猫とはまた違ったものを拾った。いや、拾ったと言うのは間違いだ。保護したと言うべきだろう。何故ならばそれは小さな小さな女の子だったのだから。

「それにしてもひどい雨だな」

仕事場であるイギリス警察庁からの帰り道の途中に、雨宿りをしながら悪態をついていた。最近雨続きではあったが、まさかイギリスで台風並の大雨に遭遇するとは予想外だ。お陰で天気予報とは案外あてにならないものだと再認識させられた。傘は持っているがこの雨だとあまり意味を成さない。今は道路の下に通っているトンネルの中で雨が大人しくなるのを待っている途中だ。トンネルの天井に付けられた明かりが断続的に点滅する様は、俺の気分をより一層に沈めた。

ふと腕に付けている時計を見た。短い針が九を少し越えた辺りを指している。明日が休日とはいえ、あと一時間後には家に着きたいものだ。内心溜め息をついた所でジャリっと地面に何かが擦る音を耳にした。大雨にもかかわらずそんな音を聞き取れたのはここがトンネルだからと言うのが大きいだろう。

何かいるのかと思い、特にやることも無いので音のした方に行くことにした。妙に響く自分の足音を聞きながらさして長くもないトンネルを歩いていくと、なにやら布を被った変な物体が見えた。俺の膝丈ほどの大きさで、上からボロボロになった黄土色の布を被っていた。目の前に移動して、しゃがんでしばらくそれを見つめていた。すると、ごそっとそれが動いたのだ。何かの生き物なのかと意を決してぺらっと捲ってみ

る。

まず目に留まったのは、土汚れや光量が少ないせいで酷く濁って見えた金色の長い髪だった。下には膝を抱えて丸くなっている小さな人の胴体がある。蹲っているので顔は見えないが、どうみても子供の女の子だ。

（アジア人……いや、日本人か？）

まさか夜中のイギリスで自分と同じ日本人に会うとは思っていなかった。俺がそんな考えを巡らせていると、俺が布を捲ったことに気がついたのだろう。自分の体に埋めていた顔を上に上げ、俺の顔を見た。そうすると必然的に見つめ合う形になる。

「……。」

「……。」

何をどうしたらいいのかよく分からないので俺もこの子も固まったままだ。

（……それにしても）

全身傷だらけだ。体も泥沼に放り込まれた後のように汚れている。いや、その前にそもそもこの少女は服を着ていなかった。だからか少し見ただけでも彼女が痩せ細っているのが分かる。すると、そんな彼女が突然立ち上がって逃げるように外に向かって走り出した。だが俺から数メートル離れた所で……。

ズシャッっと盛大に前から突っ込むように転んでしまった。俺はゆっくりと腰を上

げて、彼女の元へ向かう。俺が側に寄ると急いで起き上がろうとするが、力が入らないのかモゾモゾと芋虫のように動いてしかいなかった。俺は、もしやと思ってしゃがみ、彼女の足と手をとって見た。触れる寸前にビクッと一瞬動いたが、俺はお構い無しに続けた。

　思った通りだった。全身酷いとは言ったが、それ以上に足が酷い。膝下なんかは泥や血の塊のせいでどれが皮膚か分からない。

「……はぁ」

　ほっとく訳にもいかないかと、俺はしゃがんだまま少女に背を向け言った。

「ほら乗れ。そんな足じゃ歩けないだろ。それにーー」

　目線をトンネルの入り口に向けた。

「ちょうど雨も小降りになったところだしな」

俺の住まいはごく普通のマンションだ。いや、普通より少しボロいかもしれない。というのも、初めての猫を引き取った時に当時住んでた住居がペットを飼うのを禁止していたのでわざわざこんな所に住むことになったのだ。だがそれでも不満に思った事などほとんどない。前より駅に近くなった分こちらの方が良いかもしれないと思ったほどだ。背中に少女を背負いながら扉の鍵を開けて中に入る。中は特に何の特徴もない普通の内装だ。よく言えば整っている、悪く言えば何もないと言うべきか。取り合えず自分の部屋に入って少女をベットに下ろした。顔を見たが会った時と何ら変わってない。何を考えてるか分からない顔だ。上着を脱いでネクタイを緩める。それをクローゼットに掛けて少女の方を向いた。

「少し待ってろ」

そう言って部屋を出て救急箱を取って再び部屋に戻った。少女は俺が出た時と何ら変わりない状態で大人しく座っていた。

「その布こっちに渡せ」

彼女が身に纏っているボロボロの布を取らなければ、傷の手当てが出来ない。しかし彼女はぎゅっと力を入れて布を渡そうとはしなかった。仕方ないと無理矢理それをひっぺがして布を取り上げた。使い古されたボロ布が彼女の手から離れる。簡単に引き剥がせることができて少し驚いてしまった。少女の裸体が晒される。明るい所で見

たお陰でさっきより体の傷がよく見えた。手足は擦りむいたような細かい傷がほとんどだ。足の傷が酷いのは素足で歩いていたからだろう。他はそこまで目立つ傷はなかった。だが一つだけ気になる点があった。

（こいつは……）

背中に大きくはないが、他とは異なった種類の傷があった。彼女の傷は打撲や擦りむいたものがほとんどなのだが、背中に三本並んだ皮膚を裂いたような、他より少し深い傷があるのだ。治ってきているので何によってついたものかは分からないが、一ヶ所だけそんな傷があったのだ。まぁ何かに引っ掛かってしまいできたのかもしれないし深く考えるのは止めておいた。

「さて、風呂場に行くぞ。お前は身体中汚れているからな」

手で抱えて行こうとして、再度俺はこの少女を見た。そしてその時、あることに気がついた。

「お前、何を持ってるんだ？」

少女は右手に青色に輝く、何かを持っていた。

「……十字架か？」

俺がそう言うと、少女は両手を使いそれを胸の前でぎゅっと隠すように握った。

「別に取りやしない。それよりほら、さっさと行くぞ」

恐らく余程大事な物なのだろう。俺から見れば、少し高価そうな小さな十字架としか見れないが。まぁとにかくと、風呂場に二人で行き体をぬるま湯のシャワーで流してやった。痛がっているが、傷の中の泥を落としてやらないと破傷風などの病になってしまうので仕方ない。風呂から出し消毒をして絆創膏(ばんそうこう)や包帯を巻いて治療した。

そして、落ち着いたところで俺は少女に向かい、こう言った。

「腹減ってないか?」

「……。」

俺がそう言ってやると、しばらくはボケッと黙ったままだったがーー

こくん

と一つ頷いた。

それを聞いて俺は台所に向かった。料理は昔からやっていたので特技の一つだ。何がいいのか分からなかったので、俺が小さい頃よく食べていたチャーハンを作ってやることにした。何の工夫もない普通のチャーハンだ。俺は出来立てを机の上に置いて、少女を座らせた。

「ほら、食えよ」

机の上のチャーハンをあまりにも凝視していたので、俺は早く食べるように言った。

すると、少女はスプーンを握りしめ思いっきり器の中身を口一杯に詰め込んだ。予想通り、相当お腹が減っていたのだろう。

「……喉、詰まらせんなよ」

その様子に苦笑しつつ、皿の横に水の入ったグラスを置いてやった。すると、少女は食事を中断しネズミの様に膨らませた頬のまま、こちらをじっと見てきた。

「……どうした？」

しかし少女は何も話さないで、首をふるふると横に振ると、今度はゆっくりと食べ始めた。その様子に俺はふと微笑むと、少女から少し離れた位置にあったソファーに座ってその様子を眺める事にした。ゆっくりと、それでも確実に減っていく皿の中。目の前で一生懸命、食事をしているのは可愛らしい普通の少女だ。だが、そんな少女が何故傷だらけであんな所にいて、一枚の布を纏うだけの姿で座り込んでいたのか。何か事情があるのだろうが、それは彼女の口から直接聞くしかあるまい。そんな事を考えている時に、かたっと音がし、それで俺はハッと意識を戻した。少女が食事を終えて、スプーンを皿の上へと置いた音だ。俺は座ったままで、少女の方へと顔を向けた。

「もう、いいか？」

俺は、彼女がコクンと一つ頷いたのを確認すると食器を台所へと持っていき、食器を洗い始めた。シンクへと水が流れる音と共に、雨がマンションの窓へと当たる音が聞こ

える。もう少し帰りが遅かったら大変だったなと思いながら、洗い終わった食器をひっくり返してシンクの横へと置いておいた。

「さて、もう眠い……だ…ろ。もう寝たのか」

後ろへと振り返ると、少女は机の上に突っ伏しながら目を閉じ、寝息をたてていた。あれだけボロボロだったのだ、疲れて眠ってしまっても無理はない。このままでは駄目だと俺は彼女をベットへと運ぶことにした。彼女を腕へと担ぎ上げ、自室に入り彼女をベットへと寝かした。包帯だらけの姿はミイラ男ならぬミイラ女だったが、気持ち良さそうに眠る彼女を見ていると、俺も眠気がやって来た。風呂も夕飯も食べてないが、この睡魔には抗えない。一つあくびをし、俺も寝るかと思った所で気がついた。ここにベットは一つしかない。少女がベットを使っているとは言え俺自身、床やソファーで寝るのは勘弁したい。

となると、俺も一緒にベットに入って寝ることとなる。まぁ俺は幼い女の子に欲情する変態的趣味は持ち合わせてはいないので、別に問題は無いのだが、何ぶん怪我人が横で寝ているのに、俺のせいでまた怪我をしてしまっては本末転倒だ。俺は床に薄い布を敷いてそこで眠りに入ることにした。部屋には雨と風の音が響き、隣では深い息づかいが聞こえる。俺は目を開けて、体を横へと傾け、深く寝入る少女の顔を覗き見た。俺はこの少女を、犬や猫の様に突発的判断で連れ帰ってしまったが、一体どういった事情で

ああなってしまったのか？これからどうするか、と少し考えた。だがほんの少ししした所で止めた。真実を確定するにはあまりにも情報が少なすぎるからだ。

「……明日、役所にでも行くか」

俺はポツリとそうこぼして、体を元へと戻す。目を閉じるとすぐに意識が離れていく。外から聞こえる雨と風の音を聞きながら、静かに俺は寝息をたてていた。しかしその時、俺は知るよしもなかった。この少女が常人とは事を逸した事情を持っていたことを。そして、俺の人生をひっくり返し、全てを変えていく、そんな出会いであったことも。

「少しヒヤッとするが、我慢しろ」

俺はそう言って、ベットで横たわる少女の額の上に濡れたタオルを置いた。置いた瞬間に彼女はビクッと体を揺らした。思っていたよりも冷たかったのだろう。俺は氷水の入った桶を足の下へと置いて、俺の方をぼうっと見ている少女の顔に視線を合わせ

た。あまり、しっかりと思考が働いていないようだ。
「おそらく過度の疲労と、心身の痛みのせいで熱が出たんだろう。しっかりと休めばすぐによくなる」
　彼女は何も反応をせず、焦点の合ってない目で俺を見ているだけだった。この少女がこうなったのは俺が朝、起きた時からだ。俺が目を覚まし、しばらくした後で彼女は起きた。しかし、起きても様子が変だったのでどうしたのかと体に触れてみればこの通りだったのだ。熱は出ているが、風邪の症状が無いことから、これが疲労から来ていることは間違いなかった。
「俺はこれから少し出掛けてくるから、大人しく寝てろよ」
　そう言って俺は立ち上がって、部屋を出るために一歩、外へと歩き出そうとした。しかし、右足に何か引っ掛かったような違和感を感じた。違和感のある方へと目を持っていけば、そこには小さな手が俺のズボンの膝裏辺りを掴んでいた。
「どうした、何か用か？」
　しかし、相変わらず彼女は首を横に振るだけで言葉は発さない。言葉にしないので、なぜ彼女が俺を止めたのか分からない。
「……側にいた方がいいのか？」
　当てずっぽうで適当に口にした言葉だったが、俺が思い付くのはこの程度が関の山

だ。俺は質問に対する返答をしばらく待っていたのだが、彼女はふと仰向けになりながらこくりと一つ頷いた。なんと、当たりだったらしい。理由はどうか知らないが、もしかしたら精神的に不安なのかもしれない。

「……分かった分かった。少しだけ待ってろ、準備しに戻るから。安心しろよ、すぐ戻ってくる」

それを聞いて安心したのか、少女はすっと手を離してゆっくりと瞼を閉じた。俺は静かに部屋の扉を開けて、粗方必要な物をまとめて持ってきた。持ってきたのは彼女に飲ませる為の水分や、暇を潰す為の本の類いだ。俺はベットの横に椅子を置き、そこで本を開いた。天気は晴れやかな快晴で、昨日のような雨風の音は一切しない。だからか、ベットで寝ている少女の寝息がひどく大きく聞こえた。

「……色々と聞くのは、元気になってからだな」

一つそう呟いて、俺は再び文字の海へと意識を潜らせた。

あれからどれだけ時間がたったのか、少なくとも日が落ちて辺りが暗くなるほどの時間がたったのは間違いない。その間、ずっとこの少女の隣で座りながら本を読んでいた。別に本が嫌いなわけではない、むしろ好きな方なのだが俺としては少し時間を無駄にした気分だった。今日が休日と言うこともあるだろう。まだ隣の少女は寝たままだ。

「……さて、飯でも食うか」

本を読むのに夢中で昼飯をとるのを忘れていたのもあり、俺は激しい空腹を感じた。席から立ち上がり、キッチンへと向かう。だが今更、本格的な料理などする気にもなれず、今晩は簡易なインスタント食品ですますことにした。そのために俺が鍋でお湯を温めていると、後ろからギギッと木の軋(きし)んだ音が聞こえた。気配を感じ振り替えると、そこには寝ているはずの少女が扉を支えにかろうじて立っていた。

「……どうした? 寝てないと駄目だろ」

俺は鍋を温めていた火を一旦止めて少女の元へと向かう。しゃがんで顔を見たが、表情に疲れはあるものの、随分と良くなっている。俺は彼女の額に手のひらを当てて熱を測った。

「……熱はかなり引いたようだな」

まだ少し過剰な体温が残っているものの、おそらく明日には良くなっているだろう。

「治りかけが一番重要なんだ。今はしっかり寝ておけ」

俺がそう言うと、今度は俺の服袖を握ってきた。おそらく、勝手にどっかに行くなと言いたいのだろう。

「分かった分かった。すぐ行くから早く寝ろ」

俺は少女を抱きかかえ、そのまま寝室へと向かった。その最中（さなか）、ふと寝息が聞こえたので自分の腕の中を見てみると案の定、彼女はすやすやと眠っていた。

「……寝付き良すぎるだろ」

それが風邪のせいなのか、傷のせいなのか、もしくはそれ以外の何かなのかは分からないが、昨日会った人間にここまで甘えるのはどうしたことか、不安を感じているんだろう。俺はそのまま彼女をベッドに下ろし、自分もそのまま椅子で眠ることにした。そして、ふと少女が来てからのことを振り返った。ちょっとした偶然で、明らかに異常な状態で出会った少女のことを。彼女は何者なのか？なぜこんな状態でここにいたのか？

「……まぁ明日、仕事中にでも調べてみるか」

そう呟いて俺は瞳を閉じた。ただ、明日は仕事で朝が早い。少女と会話ができるのは俺が帰ってきてからだろう。名前だけでも聞いておいて良かったと今更になって思った。俺は彼女の名前を頭の中に思い浮かべる。

『峰理子（みねりこ）』それが彼女の名乗った名前だった。

つなぎはじめ

イギリスのロンドン武偵署で俺はひたすらに個人情報ホルダーを漁っていた。これはイギリスに在住している人物の大方な個人情報を閲覧できるものだ。もちろん上からの許可を得なければいけないし、見られるのも電話番号や住所、名前だけである。

「……無いな」

上司のパソコンにあるフォルダー内を漁っても『峰理子（みねりこ）』と言うと名前にはヒットしなかった。日本から転住してきたと考えるのが妥当だったが、こうなると少し事情が変わってくる。もし観光目的で来た家族からはぐれたのなら、今頃ここに連絡の一本でも来ている筈だし、それなら全裸に傷だらけ等（など）と言う状態でトンネルの中にいるのはおかしい。そうなると考えられるのは不法入国しか無い訳だが……。

「はぁ、また面倒なのを拾ったな」

自然と溜め息かこぼれた。今回は安易に拾い物などするべきではなかったか。これからどうするか、もしこれを報告するならどうしたものかと頭を悩ませていると、急に後ろから声がかかった。

「何か見つかったか、筒香（つつごう）？」

俺はかかった声の方へと向き直った。そこにはガタイのいい、いかにもイギリス人らしい男が立っていた。
「いえ、期待したものは何も。机を占領しておいてすみません、カールさん」
彼は俺の直属の上司に当たる人物だ。武偵ランクもSランクで、俺はいつも世話になっていた。
「ああ気にするな。それより、どうした?また何か厄介事にでも会ったか?」
「まぁそんな所です」
するとカールさんはガハハと豪快に笑った。
「そんな事だろうと思ったぞ。お前は昔から何かと変なものを寄せる体質だからな」
全くである。
「深くは聞かないが、手に気負えなくなったら連絡しろ。金のこと以外なら相談にのってやるよ」
何ともまぁ人のいい上司だ。本人もこう言っている事だし、本当に困った時は全部この人に押し付けよう。
「ありがとうございます」
俺がこう言うと、再びカールさんはガハハと笑い、オフィスの奥へと消えていった。

峰理子の事もあり、俺は仕事を早めに終わらせ、帰宅することにした。見慣れた帰り道を歩き、見慣れた扉に手をかけて開ける。だか俺が扉を開け見たものはそれはそれは見慣れない光景だった。

「……お前、何やってんだ?」

峰理子が我が家の猫や犬を身体中に身に付けていた。こう見ると、毛皮を丸々被っているみたいだ。それにしても家のペット達は人懐っこいが、まさかこれ程までとは思ってもみなかった。

「全く、治ったのなら大人しくしとけ」

俺は呆れ声をだしつつも、動物の山から首根っこを掴み、峰理子を引っ張り出した。すると彼女は、俺の方をじっと見て一言、口を開いた。

「……名前」

「あん？」
「この子の名前は何て言うの？」
俺は彼女が俺の足元で丸くなっている茶色がかった猫を指差しているのに気づいた。
「ああ、そいつは〝チョコボール〟って名前だ」
「……なんで？」
「理由か？理由はこいつが春夏秋冬（しゅんかしゅうとう）いつでも丸くなる変な猫でな。それに毛が茶色の毛をしてるだろ。だからチョコボール」
確かこの猫は俺がイギリスに来て初めて拾った猫だ。もうかなり年寄りだが、今でも元気な姿を見せている。峰理子はしばらくその猫を見ていた。俺はその間、彼女をゆっくり下ろして地面へと着地させる。そして俺は、家に帰ったら聞こうと思っていた事を聞くことにした。
「お前、どうやってここに来た？」
彼女は口をつぐんだままだったが、少ししてこう答えた。
「……船に乗って」
「船？」
「大っきい船に乗って来た」
おいおい、そりゃ多分貨物船だぞ。不法入国確定じゃねえか。それにしてもよく見つ

からなかったものだ。
「何でそんなことした？かくれんぼしててそうなったわけでもあるまいに」
少女は俺の質問に返答しないで、そこから黙りこくって一言も喋らなかった。
「……まぁいい」
理由を聞くのは後からでもいいだろう。聞いたところで、彼女が不法入国したのは間違いないのだ。しかし話を聞いた感じでは、一人で貨物船に乗ったことになる。
「……お前、家族はいないのか？」
こんな幼い少女が一人で国境を越えてここまで来た。もし、家族がいるならそこへ送り返した方がいいだろう。しかし彼女は俺の言葉を聞くと、顔を歪ませて、その大きな目に雫を溢れさせた。
「おいおい、泣くなよ。悪かった、無粋な質問をした俺が悪かった！」
俺は慌てて、泣き出した峰理子の背中を撫でた。どうやら彼女にこの話題をふるのはご法度らしい。このリアクションから察するに、親と呼べるものに期待をするのは止めた方がいいようだ。だがそうなると、もう手の打ちようが無い。面倒だが、大人しく事情を話して施設かどこかに預けるしかない。不法入国者だが、この年なら罪を受けることはなはずだ。
「このまま、ここにいても仕方がないからな。明日、お前を施設に連れていく」

「……施設？」

どうやら、峰理子は施設がどういうものか分からないようだった。

「まぁ俺も詳しくは知らないんだが、要はお前みたいな身寄りのない子供達を集めて育てている場所だな。何かと不便かもしれないが、行ってみればいい場所だと思うぞ……ってお前は何をしてるんだ？」

そんな適当な説明をしていたら、急に俺のしわくちゃのスーツの端を掴んできた。

「おい、どうした？」

彼女はうつ向いたまま、ぎゅっと拳の力を強めた。俺のスーツにしわが広がる。

「……い……や」

小さな声で弱々しく何かを呟いた。

「ん？」

俺が聞き取れずに聞き返すと、峰理子はがばりと顔を上げ、大きな声でこう言った。

「嫌だ、ここにいる！」

その時、俺が見た彼女の表情は何故だろうか、昔見たとある城を連想してしまった。弱々しくそびえ立つ、その建物はどこもかしこもボロボロなのに、一向に崩れる気配が無かった。まるでそう、自分の姿を見て欲しいとそう思っているかのように。それほど今の彼女は堂々と、それでいて芯をしっかりと持っていた。

「……どうしてここにいたいんだ？」
「……だって、一人は嫌だから」
「一人って……施設にもちゃんとお前と似た境遇の子供もいるだろうし、面倒を見てくれる大人もいる。一人じゃない」
　しかし、俺の説得にも耳をかそうとしない。首を横に振って、まるで駄々をこねるようにそれを拒否した。
「それでも嫌だ！」
　断固として動じない、そんな覚悟がひしひしと伝わってくる。困った。俺は後ろ髪を掻きながら、どうしようかと思考に耽った。そして俺は心のどこかな穴のような隙が出来始めていた。じっと見つめる彼女の目を真っ直ぐに見つめ返し、そして言った。
「……ここにいたいのか？」
「うん」
「ここにいたって良いことなんて何もないぞ」
「うん」
「それでもいたいのか？」
「うん」
　いいのか？犬や猫とは訳が違うんだ。そんな軽い気持ちで決めていいものでは無い

はずだ。だが、もし俺がここで彼女を受け入れなければ、この先この『峰理子(みねりこ)』と言う少女がどんな人生を送るのか、せめて一人でも彼女の味方がいれば、そう思うと俺の胸にモヤモヤとしたものがかかっていくのが分かる。そして、もしここで彼女を拒めば、それが一生消えない事も俺には何となく分かっていた。

「……そうか」

俺は静かに腰を下ろしてしゃがみ、この迷子の少女を正面から見た。もう引けない。あんな場所で出会ったのが運の尽きだ。俺とこいつが出会った瞬間からこうなるのは決まってたのかもしれない。「ここにいたい」そんな彼女の本音を聞いた俺に、もう他に選べる選択肢は存在しなかったのだ。

「……よし、なら家(うち)に来るか」

その時その瞬間、俺は初めて家族と言うものを得た。そして、初めて俺が見た理子の笑顔も、今日この日この瞬間だった。

「あきら、起きて」
その言葉が最近の俺の目覚まし替わりだった。体を揺すられる感覚には未だ違和感を覚える。朝、起きた瞬間に人の声を聞くのもだ。
「……お前、やっぱり起きるの早いな」
寝ぼけながら枕元にある時計を見て、俺はもう一度布団を被り直した。
「……休日くらいもう少し寝かせてくれよ」
俺は聞こえないとばかりに、再び目を閉じる。だがそうは問屋が卸さなかった。
「お腹減った」
「……くそ、そう言われると起きるしか無くなるだろ」

理子と出会ってから既に一週間。もう一週間なのか、やっと一週間なのか、俺にはよく分からない。ただ、いつもと違う生活に少しばかり戸惑っているのは間違いなかった。最近は目覚ましをかけないし、酒を飲む事も少なくなった、残業も全くしないで早めに帰るようにしている。

「あれだ、食器とか出しといてくれ」
「はーい」
俺は意識のはっきりしない状態で台所に立つと、フライパン等を取り出して朝食の準備をすることにした。
これも理子が来て、変わったことの一つだ。きちんとした朝食を作るようになった。理子が来るまでは、シリアルだけで済ましたり、たまにだが食べない時まであった。
「理子、今日もやってみるか？」
俺は卵を二つ取り出して理子にそう訊ねた。
「うん！」
理子は勢いよく返事をすると、俺から卵を受け取り、ボールに向かって謎のポーズをして構えた。そして、勢いよく卵をボールの縁に降り下ろし、殻にヒビを入れて、両手でその卵を真ん中から割った。
「あっ……」
しかしその瞬間、殻も勢いよく砕け散り、
卵の中身と一緒にボールの中へと落下した。
「ははっ、残念。今日も殻あり玉子焼き確定だな」
「うぅっ」

理子は悔しそうに割れた卵の殻を見つめていた。俺はそんな理子を尻目に、ボールの中の殻を一個づつ取り出す。これは、数日前から理子がチャレンジしている壁だ。俺が卵を割るのを見て、理子が「やりたい」と言ったのが始まりだった。
「まぁ、誰しも初めはそんなもんだよ。俺だってそうだったんだ。直ぐに出来るようになるさ」
「本当？」
理子は不安そうに俺を見上げた。
「ああ、約束する。俺は出来ない約束はしない。ほら、指切りしよう」
「指切り？何それ？」
「そうだな……これをしたら、絶対約束を果たさなくちゃならない、そんな日本に伝わるおまじないみたいなものだ」
「へぇ～。じゃあ私があきらと指切りすれば、卵を綺麗に割れるようになるの？」
「ああ、なるさ。お前が練習すればの話だがな」
「分かった！じゃあ指切りする！」
「よし、ならこうして小指を出せ」
「こう？」
俺の真似をして理子はその小さい指を付き出した。

「ああ。こうやって指を絡めるんだ」
俺は自分の小指と、理子の小さな小指を絡めた。
「指切りげんまん嘘ついたら針千本の～ます、指切った」
そうして、俺の指と理子の指は離れる。だが理子は何か引っ掛かるのか、浮かばない顔をして心配そうに俺を見ていた。
「あきら、針千本飲むの？」
そこかなのか！確かに幼い子供からすれば、十分に恐ろしい歌かもしれないが……。いや、大人でも針を千本も飲むなんて恐ろしいが。
「大丈夫だ。理子が約束を守れば針千本、飲まなくて済むからな」
「そうなの？でもやっぱり心配だから、大爆発でいいよ」
「何でそうなる……余計に酷くなってんじゃねえか」
最近の子供ってこうなのか？これがジェネレーションギャップと言うやつなのか？
「まぁとにかく、このまま行けば卵くらい直ぐに割れるようになるって事だ。分かったらほら、卵をかき混ぜてくれ」
俺はそう話を切り上げて、卵の殻を取り除いたボールを理子に渡した。
「いいか、理子。我が家の卵焼きは砂糖をたくさん入れる甘口スタイルだ。お前のさじ加減で全てが決まる。しっかりやれよ」

「うん、分かった。頑張る！」
そうして俺と理子は、互いに笑いあった。そんな些細（ささい）な事が、今の俺の日常だった。

イギリスで半分、日本食と言うバランスの悪い食事をとっている俺と理子。朝の食卓を終えたので、俺は理子に今日の予定を話した。
「買い物に行くの？」
「ああ。何かと必要な物が出てきた。理子が来てから初めての休みだ。今日で必要最低限いる物は、全部揃（そろ）えておこう」
そう、理子がここで暮らすにあたって必要な物が多々、発覚したのだ。服も俺の着ている物だし、食器も俺の物では大きすぎる。歯ブラシ等（など）の日用品は帰りにすぐ買えるが、流石にサイズがある物は俺の主観だけでは不味いと思い、休みの日に買いに行く事

にしたのだ。だが、買い物に行くにはこのままでは駄目だ。

「ほら、ここに立ってろ」

「ここに？」

俺の指示した場所に立ちながら、理子は不思議そうに首をかしげた。

「ああ、少し待ってろ」

そう言って、俺は部屋の隅（すみ）にある布の塊を拡げて理子に見せた。

「どうだ！理子の服だぞ！今日の買い物で、俺のブカブカな服を着るわけにもいかないからな。サイズは適当だから合うか分からないが、まぁ臨時の服だ。贅沢は言うなよ。……っておい、リアクション薄いな」

少しは喜ぶと思ったが、当の本人は俺が拡げた服をボケッと見ているだけだった。

「……これ、理子の服なの？」

ぽつりと理子が、呟くようにそう訪ねてきた。

「あ、あぁ。そうだぞ」

訝（いぶか）しげに俺がそう言った瞬間、理子は俺の手から服を剥ぎ取って、それを胸に抱えながらぴょんぴょんと笑顔で跳びはねだした。

「やった！理子の服だー！」

どうやら、俺が思っていた以上に理子は嬉しかったらしい。そのまま、謎にくるくると回り始めた。
「喜んでくれて何よりだ。ついでに玄関にも新しい靴があるから見てくるといい」
「本当?!」
理子は俺の言葉を聞くと、バタバタと玄関の方へと駆け出して言った。
「……なんだかんだでやっぱり子供だな」
そんな当たり前の感想を呟いて、俺は朝食の洗い物を片付ける事にした。
「あきらー!」
いざ始めようと食器に手を伸ばした時、遠くから理子の声が聞こえた。
「あぁ?」
「ありがとうー!」
「……あぁ」
そう言われたのは久しぶりな気がする。
ともかくそう、今日と言う日は始まったばかりなのだ。

背伸び

日曜日の大型ショッピングモールと言うのはどこの国でも人が溢(あふ)れている。子供連れの親子や、仲睦まじく並んで歩くカップル。その他、大人数の友人同士など、数多くの組み合わせが見る場所見る場所を歩いている。そんな中に背丈(せたけ)の小さな理子が紛れ込めば、一瞬で迷子になること間違いなし。まだ新しい生活に慣れていないのか、口数が少ない様子の理子。しかしそれでも好奇心の人一倍強い彼女は、ふと目を離した隙にすぐどこかへと行ってしまう。事実、まだショッピングモールに入って一時間もたっていないと言うのに、理子を見失った回数は既に三回を越えている。これでも一応、Aランク武偵なのだが、その監視を一瞬で外してしまう理子のポテンシャルは計り知れないと感心すると同時に、子供一人を見失う俺のポテンシャルに絶望しかけている。まさか、ただの買い物でここまで心にダメージを負うとは思わなかった。しかしそれでもそんなこんなで、なんとか第一目標である服屋にたどり着く事ができた。

「じゃあ行ってくる！」

「あぁ、好きなだけ選べ」

理子はこちらに手を振って一人服屋の中へと入っていく。対して俺は、理子に五十

？（日本での一万円）札を三枚渡して、店の前のソファーに腰を下して待つことにした。しかし、子供にそんな大金を預けて、一人にしてもいいのか？という疑念が生まれるはずだ。それはもちろんある。しかしセンスのない俺が行ったところで女性の、ましてやジュニア向けの服を見ても仕方がないだろう。それに今朝、分かったことだが理子は服が好きだ。だからこうして服を選ぶこの時間は何よりの至福の時間のはずだ。それを俺が横から水を差すような真似をしたくはなかった。さらに言えば、ここでの買い物には下着類も含まれているのだ。イギリスは日本ほど敏感ではないだろうが、それでもいい歳こいたおじさんが、女性下着売り場に足を運ぶわけにはいかなかった。とまぁ、そんな多々に渡る理由があり、俺はこうして店外で待っているわけだが……。

「……遅い」

あれから待ち続けて二時間半。女性の買い物は長いと聞いたことはあるが、しかしあまりにも長すぎる。この店、唯一の出入り口をずっと見ていたので、理子が店を出て俺の目の届かない所へ行っているという事は無いはずなのだが、それでも理子を何度も見失っている俺は絶対大丈夫だと、自信を持って断言することができない。

「……仕方がないな」

あまり気乗りはしないが、もしものことがあってからでは遅い。俺は重い腰を上げて、店内へと入ることにした。店の中はとてもシンプルな造りで、イギリス国内で有名

な服屋なだけあって、品揃いは充実していた。そもそも多種多様な品物が置いてあり、値段の割にしっかりとしたファッション性のある物が多いと言うところが売りの店なのだから、当たり前と言えば当たり前だ。俺はそんな店にある、服のジャングルを進んでいき、目標（ターゲット）である理子を探し続けているのだが、一向に見つからない。となると必然的に俺が故意に避けていた下着売り場に理子がいることになるのだが……。

「……行くしかないのか」

本当にいるかも分からない探し人を探すために、変態の汚名を被らなければならないのか？そんな葛藤が渦巻く中、ふと聞き覚えのある幼い少女の声が聞こえてきた。

「理子？」

声のする方は女性下着売り場。やはり理子はそこにいたのか。しかし俺は安堵すると同時に、少しばかりの疑問を覚えた。聞こえてくる声が妙に大きいのだ。よく耳を澄まし、所々に聞こえる会話から察するに、何やら誰かともめているらしい。俺のあずかり知らぬ所で面倒ごとができるとは。こんなことならやはり俺も理子に付いていけばよかったかなと遅すぎる後悔をした。重い足取りで声の聞こえる方へと向かう程に、その会話の内容がはっきり聞こえ始める。

「だから、私はもっと大人っぽいやつがいいの！」

「お言葉ですがお客様。その類（たぐい）の衣類はお客様にはまだ少し早いように思えます」

　ようやく聞き取れたやり取りがこれだった。何をそんなにもめているのかと言う部分に関しては、この会話でなんとなく予測できる。しかしまぁ、行ってみない事には解決できないだろうことも同時に分かってしまった。もう既に憂鬱でしかない。しかし、そんなことを知っていても行かなくてはならないのだ。俺は重みの増した足で店内を進んでいくと、何やら黒い布地をつかんで正面にいる一人の女性を見上げる理子と、その理子を困った顔で嗜める店員と思わしき人物がいた。一呼吸置いて、俺はそっと彼女たちに近づく。

「あ、あの……。」

　意を決して二人の間に割って入った。俺の声に反応した、理子と店員の女性は同時に俺の方を向いた。

「あっ、あきら！」

　嬉しそうに口を大きく開けて、理子はこちらへと寄ってきた。おそらく援軍が来たとでも思っているのだろうが、それならばとんだ勘違いだ。俺は理子の頭に手をポンと置いて、先程まで話をしていた店員へと目線を上げた。

「申し訳ありません。私はこの子の保護者なのですが、何か娘がご迷惑をお掛けしたでしょうか？」

「あっ、いえ。ただお客様の選ばれた下着のサイズが明らかに違うと思いまして……。」

まぁ予想通りだ。
「……理子。その手に持っている物を広げて見せてみろ」
「分かった」
理子は笑顔で手に持っている黒い布地を広げて、俺に見せるため差し出した。それはレース付きスケスケパンティだった。
「スッゴくいいでしょ？絶対理子に似合ってるよ！」
「……。」
言葉が出ないとはまさにこの事だ。パンティ越しにキラキラとした真っ直ぐな目線が突き刺さる。何を期待しているのかは知らないが、俺はおそらくお前の期待には答えられない。
「……さて理子。それを戻して新しい下着を買いにいこうか」
「え～～！なんで!?」
「いや何でって、店員さんの言った通り、それはお前にはまだ早すぎる。身体的にも、常識的にも」
理子は裏切られたと言わんばかりの様子だが、流石にそれを許すわけにはいかない。
「そもそもそんな下着買ってもお前の体に合わなかったら意味ないだろ。いいからここは大人しく身の丈に合ったやつを買え。例えばそうだな……」

俺はそう言って、目に留まった一つの白い三角形を取って理子に見せた。
「これとかどうだ？」
子供らしいふわふわした生地に、くまさんがプリントアウトされた可愛らしいパンツだ。
「やだ！そんな子供っぽいやつ！」
「いや、お前は子供だろ」
俺のツッコミに意も返さず、理子は納得いかない様子で抗議を続ける。
「ほら、またお前が大きくなったらセクシーなパンツを買ってやるから」
「大きくなったらってどのくらい？」
「そうだな、お前の手が立ってる俺の頭に触れれるようになるくらいだ」
「そんなの永遠に無理だよ……」
駄目だ。そろそろすね始めた。まだ買う物があるのに一軒目でこれは不味い。なんとか打開策を考えた。考えた結果。
「……よし。俺の言うことを聞いてくれたらアイスを買ってやる」
結局、その言葉で全ては終結した。

理子の下着騒動が終わりしばらくして、時は昼飯時。理子も俺もその時間帯になれば当然、腹が減るわけでショッピングモール内にあるフードコートに行くことにした。時間帯も時間帯だったので、二人分の席を取るのに苦労したが、なんとかスペースを確保して、俺たちは少し遅くなってしまった昼食をとっていた。

「どうだ？うまいか？」

「うん、あきらの料理より美味しい」

「そりゃそうだろ。それで商売してるんだから」

理子は口一杯にオムライスを頬張りながら、俺にそう返す。

「でもあきらの料理の方が好き」

「なんだそりゃ？」

矛盾している理子の発言に疑問を覚えながら、俺は自身の手元にあるうどんに箸を付けた。

「食い終わったら一旦、車に戻ろう。流石にこの量の荷物を持ち歩きながら、買い物する

のはきついからな」
　俺はふとテーブルの横に置かれている、大量の買い物袋に目線を向けて言った。ちなみにその半分は理子の服である。
「理子。お前は服を買い過ぎた」
「だってあきらがこれで買ってこいって言ったから」
　そう言って理子は指を三本立てて俺に見せる。暗意にこれは俺が渡した五十？（ポンド）札の枚数を表しているのだろう。まぁ確かに、ブランドでも何でもない服屋に行って、比較的値段の安い子供服にを全てつぎ込めばこうなることは必然だった。いや、全てを使いきる理子の方がおかしいのだ。仮にもＡランク武偵なので、貧乏と言うわけではないが、それでも百五十？（ポンド）は実に痛い。どうしてくれるんだと、俺は理子をジト目で睨んだのだが、そこであることに気がついた。
「そう言えば理子。お前、あのペンダントはどこにやったんだ？」
　俺が理子を拾った時に、彼女が唯一持っていた青い十字架のペンダント。あれ以来まだ一度も見たことがなく、どうも首に掛けてる様子もない。
「鎖が傷んでて、無くしたら大変だから家に置いてきた」
「家のどこに？」
「あきらの机の引き出し」

いつの間に。と言うかそんな変なところに仕舞うなよ。しかしそれはよろしくないな。あの十字架は理子にとってよっぽど大切な物らしいから。

「なら紐（コード）の部分を今日、買って帰るか」

「うん！」

子供らしい元気な返事を聞いて俺は思わず綻んだ。しかしあの十字架は何なのだろうか？単に何か思い入れのある物と言うだけならいいのだが、どうも俺の勘がそれを否定する。あの不思議な色合いといい、光を弾くような輝きといい、単なる金属ではないはずだ。俺はそこら辺に詳しくはないのだが、少なくとも安物の模造品でないことは確か。しかしそうなるとまた一つの疑問が浮かんでくる。それは、俺の目の前にいる少女。『峰理子』は何者なのかと言う点だ。さらには俺が拾った時の状況もその疑問に拍車をかけていた。どうやったって普通の子供なら、イギリスであんな状態にはならないはずだ。海を渡ってきたのは明らかだが、それはどこから渡って来たのか。今はまだ本人の心に傷があるようなので詳しくは聞いていないが、ある程度生活が落ち着いたらそまでの経緯を聞かなくてはならないだろう。いつまでも胸に突っかかりがあるままでは安心して暮らせない。

「あきら、どうしたの？疲れた？」

突然かけられた、理子の声でハッとする。どうやら深く考えこんでいたらしく、そん

な俺の様子を見た理子は、こちらを心配して顔を近づけてきた。
「……いや、何でもないさ」
ここでぐだぐだ考えていても仕方がない。とにかく今は、目の前の事を終わらせよう。そう思い、俺は再び手に持った箸を動かした。

日が傾き、オレンジ色の光が辺りを照らす。キラキラと光りを反射する水が妙に眩しく感じる。時間にして六時。予定よりも遅い帰宅になってしまったが、必要な物は全て買えたのでよしとしよう。俺の車はテムズ川の横を沿って走っており、その車の助手席で理子はすやすやと寝息をたてながら、気持ち良さそうに眠っていた。今日の買い物でやたらとはしゃいでいたから、疲れてしまったのだろう。
「今日はこいつに振り回されっぱなしだったな」
一緒に暮らしはじめて直ぐの頃は、あまり口を開かない無口な子だったが、今日の様子を見る限り、ようやく本来の自分を取り戻してきたと言うところだろうか。

「まぁ、良いことだよな」

俺はニッと口角を上げて、理子の頭を撫でた。そっと、彼女が起きてしまわないように。

しかしその時の俺は知るよしもなかった。これが、まだこれから始まるであろう物語のプロローグにさえなっていないと言うことに。

日々徒然の変化点

少し前にも話したか分からないが、俺はよく動物を拾う。拾うと言うよりは放っておけないと言った方がいいだろう。だから俺の家には猫やら犬やらが沢山いるのだが、拾ってみると案外愛着が湧くもので、家に帰って誰もいなかった時に比べると、何やら少しだけ家に帰るのが楽しくなったりしたものだった。しかし理子と言う娘のようなものができた今では、そういったことは無くなったのだが、それでもペットと言う存在は少なからず俺の人生に影響を与えていた。例えば今、目の前で起こっている事態についてもそうだ。

「……お前はこう何で俺が遅く帰ってくる毎に犬やらが猫やらをくっ付けてるんだ？」

「だってフワフワして気持ちいいんだもん」

俺はAランク武偵ということもあり、日を跨ぐような面倒な仕事をよく回されたりするのだが、理子と共に暮らし始めた最近ではそれらが回らないように工夫してきた。しかしそれでも帰りが遅くなったり、そもそも帰ることができなくなってしまうことは少なからずある。そんな日には決まって理子が別の生き物になったかのように、身体中に

動物を張り付けている奇妙な格好で出迎えてくるのだ。いつも不思議に思い、俺は一度だけ理子に尋ねてみた事があるのだが、理子は誤魔化すようなことしか言わなかった。
「お腹減ったろ？」
「うん！」
今は八時半。いつもよりかなり遅い時間の帰宅だ。夕飯は作り置きなど全くしていないので、理子は昼から何も食べていないことになる。本当はお菓子など、間食になる物を常備した方がいいのだが、ついつい買うのを忘れてしまい、今はまだ何も置いていないのが現状だった。
「これから夕飯作るから待ってろ」
「分かった！理子は何する？」
「風呂をいれてくれ。今日は走りっぱなしだったからもうベトベトだ」
衛生科（メディカ）や通信科（コネクト）と違って、強襲科（アサルト）の俺は他の科より体を使う。だから風呂は俺にとって欠かせない一つの癒しなのだ。そんな俺の意図を組んだのかは知らないが、バタバタと急いで風呂場に駆けていった理子を尻目に、俺はネクタイ緩め、そのまま調理場に向かった。手を洗い、冷蔵庫から食材を取り出し一息つく。
「……よし、始めるか」
そう呟いて、俺は包丁を握った。

メニューはハンバーグ。手で肉塊の形を整えて、後は焼くだけの状態だ。俺自身、こう言った料理を作るのはまだ慣れていないため、いい出来とは言えないが、それでも作れるだけましだと思いたい。

「理子！お前、先に風呂に入れ。その間に俺が夕飯の支度を全部終わらせとくから」

俺はまだ料理ができていないのにも関わらず、後ろで皿を並べている気が早い理子にそう言った。

「え～！あきらと入りたい！」

俺と理子が一緒に風呂に入るのは珍しくない。と言うよりかなりの頻度でそうしている。どうやら理子は一人で風呂に入るのが好きではないらしいのだ。まぁ、この年の

子供ならそうなるのは当然かもしれない。
「ん～まぁいいか。なら風呂と晩飯どっちが先だ？」
「ご飯！」
理子は手を高々と挙げて、宣言するようにそう言った。恐らく腹が減って待ちきれなかったのだろう。正直に言うと、俺も早く何か口に入れたかったので、この理子の申し出はありがたかった。
「じゃそうするか」
理子の喜ぶ声を聞きながら、俺はハンバーグを焼き始めた。

いつもより少しだけ遅めの夕食をとり、それから俺たちは予定通りに二人で風呂に入っていた。
「キャハハハハ！くすぐった～い！」

「おいおい、大人しくしろ」
　両手で頭を洗ってやっていると言うのに、理子のやつときたら暴れてるようにしてはしゃぐ始末。洗いにくいったらありゃしない。しかし子供とは言え、自分が女性の髪を洗う日が来るとは思ってもみなかった。手を流れるように滑る金色の長い髪が、俺のごわごわとした黒髪との違いを嫌でも主張してくる。
「じゃあ流すからな。目、つぶっとけよ」
「んー」
　理子が目にぎゅっと力を入れたのを確認したので、俺は彼女の頭の天辺（てっぺん）からシャワーで湯水をかけた。
「わ〜！あはははは！」
「そんなことしてると、口にお湯が入るぞ」
　何やら楽しそうに、はしゃいでいる理子に注意をしながらも、俺は理子の髪に付いた泡を洗い流す。
「よし、もういいぞ」
　俺はシャワーのヘッドを壁に掛けて、流れ出る湯水を止めた。
「ばぁ〜！」
　手で顔を拭い、目を大きく開けた理子は謎の擬音を言って、にこにことその表情を明

らめた。
「何がそんなに楽しいんだ？」
「ん～理子にもわかんない」
まぁ子供の頃は俺も全く意味も無くテンションが上がったものだ。今の理子もそう言った状態なのだろう。そんな事を思いながら、理子の体を洗い終えた俺は自分の体を洗い、彼女と共に浴槽に入った。
「はぁ～。いいお湯だ」
「いいお湯だ～！」
俺の体に入り込み、まるで椅子のように扱う理子も、同じ感想を言った。気持ち良さそうに目を細めたまま、ピクリとも動かない。先程とはえらい違いだ。だからだろう。反響する雫の落ちる音が、妙に大きく聞こえた。その音が俺の体を芯から回復させている気がする。
それにしても今日は疲れた。朝から晩まで調査と張り込みを繰り返し、尻尾を掴んだところでやっと行動できる。もう武器の密輸入なんてそう簡単にしないでほしいものだ。お陰で遅くまで家に帰れなかった。その間、理子のことが心配だったが、今日帰ってきて安心した。何だかんだでしっかりとしたやつなのだ。まぁ犬猫を張り付けていた時はびっくりしたが……。だがあれなら理子も少しは寂しさを紛らわせるかもしれ

ない。そう思った時、俺は一つあることに気がづいた。
（……まさか）
　俺の帰りが遅い日や、家に帰らなかった翌日に決まって理子は動物を張り付けていた。それはもしかして、寂しかったからなのかもしれない。そんな考えが、風が過るようにして浮かんだ。
「……なぁ理子」
「なに？」
「今度出掛けるとき、オモチャ買ってやる」
「えっ!?本当？」
「あぁ。今思えば、前に買い物しに行った時はそんな類いの物は一切買ってなかったからな」
「やった～！」
　これで寂しさを紛らわせるのは厳しいかもしれないが、無いよりはましだろう。と言ってもこいつが欲しいオモチャなんて想像もできないが。
「それじゃ、そろそろ上がるか。のぼせたら駄目だからな」
「うん！ねぇあきら、あがったらアイスクリーム食べていい？」
「一つだけだぞ」

「分かった！」
そう言って理子は離陸する戦闘機のように浴槽から飛び出したかと思うと、そのままの勢いで風呂場を飛び出していった。俺は呆れつつも、理子の後を追うようにして浴槽から出た。

理子は決まって九時頃、眠たそうに欠伸をして目を擦り始める。そんな理子にとって、今現在の午後十時半という時間帯はもうとっくに寝てしまってもおかしくないのだが、今日は俺の帰宅時間が遅かったこともあり、彼女がベッドに入る頃には、いつもより遅い時間となってしまっていた。
「ねぇあきら、ご本読んで」
隣で寝転ぶ理子が俺にそう言った。これはここ最近、理子を寝かしつける為に俺がしていたことだった。
「何の本がいい？」

「ん～前に読んだ怪物さんの話」
俺は理子の要望を聞くために、ベッドから離れて部屋の隅にある本棚から一つの平べったい本を取り出した。それは絵本にしては少しだけ分厚く、そして少しだけ小さかった。俺はその本を持って、理子の横に寝転がるようにして移動した。すると理子は俺の半身にすがるようにして身を寄せてきた。
「眠くなったらすぐに寝ろよ」
「うん」
その返事を聞いて、俺は毛むくじゃらの化け物が描かれた表紙の本を開けた。その絵本の内容はこうだ。

とある森に一匹の心優しい化け物がいた。そんな化け物は一人の小さな少女と出会う。孤独だった化け物は、その少女と出合い共に時を過ごす度に、人の優しさを知るようになった。しかしある日、国からその化け物の討伐命令が出た。少女は化け物を庇い、その命を落とす。それに怒り悲しんだ化け物は、国の兵士たちと戦い、そして最後にはその命を散らしてしまう。そんなお話だった。

子供向けの絵本にしては何とも暗い、この話を初めて読み聞かせた時、理子はこう言った。

「この女の子も怪物さんも、お互いの事を思って行動して死んじゃったんだよね。でもどっちも死んじゃったら意味無いよ」

少女は怪物に生きていてほしかったから庇って死んだのに。その怪物が自らを命を落とすような行動をした。その事が納得いかない様子だった。しかしそれを俺に言われても困ると言うもの。そう言う話だからと言うしかない。子供のふとした質問は大人を困らせると聞いたことがあるが、なるほどやっとその意味が分かった気がした瞬間だった。

そんな些細（ささい）なエピソードがあるこの本を読み聞かせていたが、もうかなり限界に来ていたのだろう。話し始めて数分で、理子は規則正しい寝息を漏らして眠っていた。

「……気持ち良さそうにしやがって」

俺はそっとベッドから這い出て、本を棚へと戻した。それからゆっくりと部屋の扉に

向かって歩き始めた。

理子を寝かしつけた後、俺は愛喫(あいきつ)している赤マルが切れたことに気がつき、タバコを買う為に夜の町を歩いていた。静かな夜で、灯りの少ない裏路地を歩き、目的の店に向かっていたそんな時、ふと不自然な気配を感じた。背中を撫でるような、生暖かい気配が俺に触れられる。

尾行されている。

そんな考えが脳裏をかすめる。しかしそこで妙な違和感に気づいた。今、俺を尾行している人物は、気配は漏らしているのだが、それでも反撃させようとする隙がなかった。これは恐らく、わざと俺に気づかせている。

「……何者だ。出て来い！」

俺は立ち止まり、独りでにそう叫んだ。すると後ろの建物の隙間から、一つの人影が現れる。

「始めまして。筒香明君(つつごうあきら)」

低い男の声だ。俺は隙を見せぬように体を僅(わず)かにかがめて構える。そんな俺を気に

する素振りも見せず、男はこちらに歩み寄ってくる。街灯の下(もと)、降り注ぐ光でその男の顔が浮かび上がった。その顔を見た俺は大きく目を見開いた。

「……お、お前は」

驚きで思考が停止する。困惑が体に伝わり、動かすことができない。俺が見た顔、それは知っている顔だった。しかしその顔は近しい人のものでもなければ、知り合のものでもなかった。さらに言えば一度も会ったことはない。それでも俺は知っていた。その人物の顔を……。

「はじめまして。私の名前はシャーロック・ホームズ。君に話があってここに来た。少しお時間よろしいかな?」

ふるさとへ

シャーロック・ホームズ。武偵なら、いや武偵でなくても誰もが一度は聞く名だ。史上最高の探偵であり、格闘技・西洋剣術・拳銃の達人でもあり、現在の武偵の原型にもなっている天才。俺も学生時代、東京武偵高校で何度もその名を聞き、目にして、顔写真を拝んできた。しかしそれは故人として、彼の存在を教えられてきたのだ。シャーロック・ホームズは既に死んでいる。それがこの世界の常識だ。

「……お前がシャーロック・ホームズだと?そんなはずはない。彼は死んでいる」

俺はあり得ないとばかりに、目の前の男の言葉を一蹴した。

「ふむ、そう思うのも無理はない。世間一般では彼は死んだとされている。しかしそれは真実なのか、はたまた誰によって証明されているのか。そこを考えるのが武偵と言うものではないかな?」

目の前の男はしたり顔でそう言った。確かに俺はシャーロック・ホームズが死んだところをこの目で見たわけではないし、死んだとされる証拠を具体的に挙げることはできない。しかし、もしこの男がシャーロック・ホームズだと仮定すると、おかしな矛盾転が幾つか存在する。まずは俺が見た百年近く前に撮影されたシャーロックの顔写真が、

今いる目の前の男と完全に一致すると言う点だ。なぜ歳をとっていない？いや、本来なら生きているかさえ怪しい年齢であるはずなのだが、それでも生きているとしても俺の目の前にいる男は二十代頃の英国紳士となんら変わらない容姿だ。それは明かにおかしかった。そんな疑問点を思考していた時、それを遮るかのようにシャーロック・ホームズと名乗る男は話を始めた。

「恐らく今、君はなぜ私が歳をとっていないのかと考えているのだろうが、それは色々と秘密があってね」

「……なんだそれ」

どんな秘密があったら不老になれるんだ。

「しかし筒香明君。今はそんなことはどうでもいい。言ってしまうと、私が本物のシャーロック・ホームズかどうかさえ本来重要ではない」

どういうことだ？と思ったのもつかの間、シャーロックと名乗る男は淡々と続けざまに言葉を口にした。

「さて、本題に入ろう。君は最近、峰理子と言う小さな女の子と出会った。そして今は共に暮らし始めている」

なぜお前が知っている？とは思わなかった。誰でもその程度なら、調べようと思えば調べられる。

「しかし君はこうも思っているはずだ。彼女は何者なのかと」
「……あぁそうだ」
　第三者から見たら俺がそう思うのは誰でも分かる。驚くほどの事でもなかった。
「それについて私は全てを知っている」
「ッ！」
　これには流石に驚いた。俺がどこを探しても何一つ情報を得られなかったのにも関わらず、この男は理子について全てを知っていると言うのか。
「しかしこれを私が君に直接教えるのは好ましくない。私はそう推理している」
　ホームズらしい一言で締めくくり、男は微笑んで俺にこう言った。
「日本に行くといい。いずれ、全て分かる日が来る」
「……旅行に行けとでも言うのか？」
「いや日本に住む、定住するとそう言う意味さ」
「はっ、自分をシャーロック・ホームズと名乗るいかにも怪しい男の言葉を信じて日本に住めと？そんなこと出来るわけないだろ！そもそも俺が勤めてる『ロンドン警視庁（スコットランドヤード）』がそんな急なことを許可する訳がない！」
「そこは安心するといい。明日、君は転勤届けを上司から受けとる。場所は『日本警視庁』」

「なっ！」

こいつは何を言っている？俺が明日、転勤届けを受けとるだと？そんな急に？あり得ない！そもそもなんでそう断言できる？もしかすると、この男が手を回したのか？

「それに付け加えて言うと、もし君が日本に行かなければ、ちょうど1週間後に死ぬことになる。いや、殺されることになると言った方がいいかもしれない」

追い討ちをかけるように、またもや男は意味の分からない事を言ってきた。日本に行かなければ殺される!?しかも1週間後に？それではまるで俺が追われているような言い方ではないか。

「君からしてみれば、私は突然現れて妄言を吐くシャーロック・ホームズの姿をした気味の悪い男とそう感じるだろうが、それでもこれは全て真実だ」

なぜだろうか？どれもこれもこの男が言ったことはこれ一つとして現実味がないのだが、それでもそれらが全て本当のことだと思えてならない。この男の言葉にはそれだけの力が感じられた。

「では失礼するよ」

男は言うだけ言って、俺から背を向けた。しかし途中で首だけをこちらへ向けて、一言だけ残すようにして口を開いた。

「安心するといい、私は君の味方だ」

「おい待て！」

それはどういう意味だと、俺が制止するように叫んだにも関わらず、男は煙のように姿を消して深い闇に溶けていった。俺はしばらく、先程まで男がいた街灯の下を呆然と眺めていたが、ふと思い出したかのようにポツリと呟いた。

「……日本……か」

それから俺は再び歩き出し、タバコを買いに近くのコンビニへと向かう事にした。あの男の言葉を思い返しながら。

シャーロックと名乗る男と会った次の日、カールさんから俺の元に転勤届けが手渡された。しかもご丁寧なことに住む場所まで決まっており、出国するのは二日後ときた。俺たちは大忙しで準備をし何とか期日に間に合わせ、無事に俺と理子は共に日本へと到着することができた。しかしそれはただ単に昨日現れたあの男の根回しが良かっただ

けのことだ。そもそも身元もパスポートも持たない理子が二日で他国へとわたれるはずがない。いつの間にかポストへと入っていた理子のパスポートを見つけた時は、流石の俺も驚いた。本来なら存在するはずの事務処理も、なぜかやらなくていいと言われ、ここまでされれば、それらはあの男の仕業だと認めざるを得ない。

そんな経緯があり俺たちは今、日本の都内から外れた郊外にしては田舎と呼べる、小さな町を歩いていた。町並みは一昔前の日本風の家が立ち並んでおり、コンクリートブロックが俺たちの歩く道を挟むようにして並べられていた。

「ねぇあきら」

「ん？」

「これから理子たちが住む家ってどんななの？」

理子は新しい住居にわくわくしているのか、少し落ちつきのない様子で俺にそう尋ねた。

「ボロいアパートだ。しかも誰も住んでいない。そこが丸々全部、俺たちの家になる」

「へぇ～」

分かってるのか分かってないのか曖昧な返事をして、理子は背中に背負った明るい黄色のリュックを大きめに揺らした。

「さてもうすぐだ。頑張って歩けよ」
「うん！」
　俺がそう言うと、理子は歩く速度を早め、繋いでいる俺の手を少しだけ前へと引っ張った。そんなやり取りをしてから十分後、俺たちは辺りが更地（さらち）だけの道の開けた場所へと来た。コンクリートブロックの代わりに、丈（たけ）の小さな雑草が俺たちを挟み込んでいた。歩く道は土混じりの砂利が敷き詰められており、歩くたびに小石が擦れるような音が足下で鳴る。そんな辺鄙（へんぴ）な道を少しだけ進むと、赤い屋根のボロいアパートに着いた。見る限り、二階建てで下に四部屋、上にも四部屋と合計八部屋の小さなアパートだ。屋根のペンキは雨風のせいで剥がれ落ち、鉄で出来た階段や支えの柱は錆びて風化してしまっている。アパートの前にある小さな庭のようなスペースは雑草が生い茂（まつた）り、とても普通に生活できる環境ではなかった。大家は存在しないようで、家賃も全く必要ないのだが、それでもここまでボロボロなのはあまりいただけない。
「……もう少しマシな場所を選べよ」
　俺は自称シャーロック・ホームズの顔を思い浮かべそう呟いた。贅沢は言えないが、俺が前に住んでいたアパートよりも相当酷い。
「凄い！凄い！凄い！」
　しかし理子はそんなお化け屋敷にも似た住居を気に入ったのか、満面の笑顔で興奮気

味にそう叫んだ。そんな理子の姿を見ると、不思議とここでもいいかと思えてしまう。
さて、写真で見たとは言え実物を見るとこんなにも違うものなのかと溜め息を吐いて、俺は理子の手を引きアパートの入り口へと歩き出した。
「荷物が届く前に少しだけ草刈りをしないとな。理子、手伝ってくれるか？」
「任せて！理子は草刈りのぷろふぇっしょなんとかだから！」
理子はそう言うと、俺を見上げニコッと白い歯を見せてそう言った。俺も同じようにして理子へと笑顔で返す。
俺の手に繋がれた小さな小さな彼女の手は、どこか暖かく、そして優しく感じられた。
俺は、俺がつないだこの理子（少女）の手を、彼女が離すまでつなぎ続けようとそう決めた。それは俺が生まれて生きてから初めての、固い固い決意だった。

そしてその手はつながれ続け、あれから二年の時が流れる。

回った車輪

カーテンを開け放った。春先の暖かい日溜まりが地面へと降り注ぐ。窓から見える草花が、青々と生い茂っており、風にゆらゆらと揺れている様はまるで喜び踊っているかのように見えた。まだ眠気の残る頭が太陽の明かりにより段々と覚醒される。俺は目を細めたまま、部屋から出るための扉にふらふらとした足取りで向かい、そしてその扉の前で一旦足を止めた。手を伸ばし、襖の取っ手に手をかけ横へとずらし開けた。

「あっ、やっと起きた！」

幼いソプラノ声が俺の耳へと届く。目の前には金髪のポニーテールがひょっこりと写り込む。それは俺がよく知る小さな少女の頭だ。彼女は朝食の用意をしていたようで、抱えるようにして持った白い皿を机の上に置こうと手を伸ばしていた。しかし俺が現れたことで彼女はそれを中断し、子供特有の幼い顔を俺の方へと向けた。

「今日は土曜日だけど、早く起きなきゃ駄目なんだよ！」

「……そうだっけ？」

「うん！今日は理子と外で遊ぶ約束してた！」

俺はまだぼやけた頭で、そんな約束もしたなと思いながら後ろ髪をかいた。寝起きの

だるい体で外出しなければいけないのかと、少し憂鬱になりながらも安易に約束をしたことに後悔した。だが約束してしまったのは仕方ない。
「もしかして忘れてた？」
「……忘れてはないさ」
　正直なことを言うと忘れていたのだが、それを言うとまた理子が怒りだすので、俺は誤魔化すような言い方をして言葉を濁した。しかしそれでも理子は納得したようで、よしと頷いてから再び手に持った皿を全てテーブルへと並べ始める。そしてそれらを全て並び終えた後に、俺の方へと向き直ってこう言った。
「おはよう、あきら！」
「……おはよう、理子」
　俺はまだ彼女の手をつないでいた。

　俺が理子と共に日本へと移住してから二年が過ぎた。しかし俺たちの暮らしはここ

に来る前と何ら変わってはいなかった。俺は月曜日から金曜日まで、武偵署に出勤し、理子はその間家で留守番。無論、理子を地元の小学校へと入れようか迷ったこともあるが、俺はそうしなかった。別に何か法的に問題がある訳ではない。ただ単に、あの男の言葉がずっと引っ掛かっていたのだ。

『 もし君が日本に行かなければ、ちょうど1週間後に死ぬことになる。いや、殺されることになると言った方がいいかもしれない 』

俺はその時、自分が追われているような言い方だとそう思ったが、少し考えてその可能性は低いと判断した。まがりなりにも俺は武偵であり、犯罪者に恨まれることはもちろんある。しかし、それでもあのタイミングで言われたと考えるならば、あれは理子が追われていると考えるの方が自然だ。勿論、あの男の言葉が全て真実だったらと言う前提ではあるが……。

なので俺は極力、理子を日本の戸籍に載せたくなかったのだ。だがそれを俺だけで決めるのはよくないと、理子に学校へ行きたいかと聞いたことがある。それに対して理子は別にいいと、そう言ったので今はこのスタイルで日々を過ごすことにした。だが、実態の見えないものにいつまでも怯えると言うのは少し滑稽で、さらに言えばこんな生活を続けていても理子のためになるとは思えなかった。だからあと一年、何もなければ俺は理子を学校へ入れようとそう考えていた。

とにかく今はただ、二年前と変わらない生活を送っている。ただその事実を俺は少しではあるが嬉しく感じていた。

俺たちが暮らすアパートの前には大きな庭、と言うよりは広間と呼べるスペースがある。ここに来た当初は、雑草が腰の高さまで伸びきっていたのだが、なんとかそれらを抜いたり、除草剤を撒いたりしてそれらを全て除去した。今ではほとんどの地面が黄土色の土で埋め尽くされており、休みの日にはそこでよく俺と理子は一緒に遊んでいた。それは今日も例外ではなく、この無駄に広い広間に、俺と理子は二人で遊ぶ約束をしていた。いや、今日のところは遊ぶとはまた少し違うかもしれない。

「今日こそは成功させる！」

「おう、がんばれ」

理子は意気込んだ様子でピンクのヘルメットを付けて、小さな可愛らしい自転車に跨がっていた。これで見て分かる通り、理子は自転車に乗る練習をしていた。事は俺が理子と共にスーパーに買い物に行った帰り道で、理子と同じくらいの子供が自転車に乗っているのを彼女が見たのが始まりだった。

「理子も乗りたい！」

結果、次の日に店に行き自転車を買ったのだが、まだ理子はその自転車を乗りこなせていないでいた。日数にして一週間、運動神経は決して悪くない、むしろ女の子と言う部分を考えればかなり良い方だ。しかしなかなかコツを掴めないのか、理子は今日のこの日まで、自転車に乗れないでいたのだ。

「いいか、車輪を見るな。俺を信じて前だけ見てろ」

「分かった！」

俺は理子が乗る自転車の後ろを持ち、彼女が進み出すのを待った。一拍置いてから、深く深呼吸するのが分かる。意を決したのか、理子は足を動かして車輪を回し始める。自転車はゆっくりと、それでも確実に前へと進んでいく。俺が自転車を支えていたものあり、今のところは順調だった。もうそろそろかと、俺は理子に何も告げずに自転車から手を放した。

「わっ！」

すると急に自転車を操作していたハンドルがぐらぐらと揺れ始め、バランスが崩れだす。このままでは危ないと、自転車が転倒する瞬間、理子だけをひょいっと担ぎ上げるように救出した。取り残された自転車だけが地面を擦れるようして滑り落ちる。俺は新たな傷が付いたその自転車をしばらく眺めたら後、抱き上げた理子へと視線を戻した。

「……どうだった?」

「……難しい」

理子は落ち込んだ表情を見せた後、そうポツリと俺に言った。

「そうガッカリするな。誰だって最初はできないもんだ」

「でも理子、ずっと練習してるのに全然できないんだもん……。」

恐らく、自分と同じ年の子が自転車を乗りこなしている事が気にかかっているのだろう。

「大丈夫だ。ずっと練習をしてるんだろ?ならもうすぐ出来るようになる。俺だってお前ぐらい小さかった頃は、毎日ボロボロになりながら練習したもんだ」

「あきらも?」

「あぁ、そうだ」

理子はしばらく俺をじっと見た後――

「……もう一回やる」

ーーとそう言って、下に降ろすようにと俺の頬を手で叩いた。俺は理子のその様子に思わずほころんで、彼女の思うように理子を自身の腕から下ろしてやった。降りるやいなや、理子はすぐさま自転車に向かい、そして跨がった。

「あきら、もう一回！」

「よし、なら今日はとことん付き合ってやるよ」

そうして俺も理子の方へと向かって歩く。きっと理子ならあと少しで自転車を扱えるようになるだろうと言う確信を持って。

理子が練習を始めて三時間ほどたち、俺たちは一旦、休憩を入れることにした。アパートの影でガラス製のコップに入っている水を飲んで、なんともなしに外の景色を見る。そんな時、唐突に理子は俺に話しかけてきた。

「ねぇあきら」
「ん？」
「〝武偵〟って面白い？」
　今まで、武偵について聞かれたのはこれが初めてだったので、俺は多少なりにも驚いた。
「いや、面白いも何も仕事だからなぁ」
「そっか……。」
　理子はそれ以上、何も聞かずに俺と同じように、まるでどこかも分からない異次元を覗いているような虚ろな目で空を見ていた。
「でもまぁ、面白いか面白くないかって言われれば面白いな」
「そうなの？」
　そこでやっと、理子は焦点を戻して俺の方へと目線を向けた。
「あぁ、何が面白いかって言われれば難しいが、少なくとも好きじゃないとこんな仕事やってられないぞ」
　生活が不規則になるし、さらに言えば命を張っているのだ、仕事でいつ死んでもおかしくはない。その割には給料は安い。
「……何で俺が武偵になったか教えてやろうか？」

「うん、知りたい！」

理子はツインテールを大きく揺らしてキラキラとした目をして元気よく答えた。

「そうだな、あれは俺がちょうどお前ぐらい時だった。俺には親も兄弟も親戚も誰もいなくてな、施設で暮らしてたんだが、月に一回その施設にある図書室の本が入れ替えられる時期があったんだ。別にその時は本なんか好きじゃなかったんだが、何を思ったかふと新しく入った本を見てみようと施設の本棚に行ったんだ。そしたらたまたま一つの本が目に留まってな、その本はとある有名人について綴られていたんだ」

今でも鮮明に思い出される。あの本を開けた瞬間を。あの男の物語を。

「『大怪盗アルセーヌ・リュパン』。俺が手にした本には、その男について書かれていたんだ」

俺がそう言った瞬間、理子はビクリと体を震わせて驚き、何かを恐れるような顔を浮かばせた。

「どうした？」

「う、うんうん。何でもない！」

理子は無理矢理に作ったとしか思えない笑顔で俺に答えた。俺は不審に思いながらも、深くは言及せず話を続けた。

「まぁとにかくだ。小さな餓鬼だった俺はその怪盗に憧れたんだ。カッコイイとか思っ

てな。その当時は怪盗になりたい！と思ったりもしたんだが、そういうわけにもいかないだろう？だがらそんな怪盗を捕まえられるような男になりたいと思ったのが、俺が武偵になりたいと思った始まりだ」

雑ではあるが、一先（ひとま）ず話し終えたので俺は理子のリアクションを確認するべく彼女の顔を見た。

「……こんなんでいいか？」

「……うん、ありがとう。あきら」

理子は暗い表情で礼を言った。もしかして俺の話しは詰まらなかったか？なんて思ったが、あえて口に出そうとは思わなかった。そんな理子の表情は、練習が再開するまで続いた。

空には茜色の空が広がっており、二紙へと沈む太陽が山影に隠れて少しばかり欠けていた。そこから発せられる光は、日中より眩しいとさえ思える

「よし、行くぞ！」
「うん！」
俺は理子の乗る自転車を押し、理子もそれに同調するようにペダルを力強く踏み出す。車輪が回り始め、自転車が勢いよく前進する。
「離すぞ！」
「うん！」
前とは違い、今度は理子に確認を取ってから自転車を支えていた手を放した。俺と理子の距離が離れて行く。車輪が回って地面を滑る。夕焼けの光が理子の髪を明るく照らす。俺はそんな様子を眺めながら理子の行く末を見守った。理子の乗る自転車の起動はぐらぐらと揺れながらも、しっかりと確実に前へと進んでいく。
「あきら！あきら！理子乗れてる！自転車に乗れてるよ！」
理子は振り替えって満面の笑みを見せながら俺にそう言った。
「あぁ、乗れてるなっておい！前を見ろ！」
「えっ!?うぎゃっ!!」
理子の目の前にコンクリート壁が迫り、自転車の前輪が壁へと激突する。スピードは遅かったので、そこまで派手なぶつかり方ではなかったものの、それでも打ち所が悪ければ大惨事になりかねない。

「おい理子！大丈夫か？」
　俺は理子の元に急いで走り寄って、自転車と共に倒れている理子の側でしゃがみ近寄った。
「いてて……。うん、大丈夫」
　どうやら大した事はなかったようで、理子は腰を擦りながら、ゆっくりと立ち上がった。
「それよりあきら！理子、自転車に乗れたよ！」
　理子は起き上がるや否や、俺に向かってそう言い放つ。
「あぁ、よくやった！そりゃあんだけ努力したんだから当たり前だ」
　理子はにひひと口角を上げて、俺を見上げた。
「よし、今日はお祝いだ。夕飯はお前の好きなものにしてやるぞ」
「えっ!?いいの？」
「あぁ、もちろんだ」
　その事が余程嬉しかったのか、理子は力一杯に片手を挙げて高らかに宣言した。
「ならオムライス！オムライスがいい！」
「オムライスね。よし、じゃあ自転車を仕舞って家に入るか」
「うん！」

そうして俺と理子は夕日を背にしてアパートへと足を向ける。その夕焼けの明るさは、俺が今まで見たどの夕焼けよりも美しく、そして鮮やかに感じた。

今日も雨

日本で夏に入った直後、この時期に訪れるものと言えば〝梅雨〟だ。普段、見たことの無いような大粒の雫が、屋根に地面に叩きつけられる。決して良物件でないこのアパートに、この雨は激しく強過ぎた。ガラガラと鳴り響く雨音が、一昼夜いつでも止むことはない。しかしこんな雨の日は理子と初めて会ったあの日を思い出させる。雨から逃れる為に入った橋下のトンネルで、理子が一人膝を抱えていたあの夜を。俺はそんな物思いに耽って中断していた読書を再開しようと、手に持っていた本に再び目を落とした。しかしそこで唐突に俺の真横から声がかけられる。それはうんざりとした、この雨に負けない程に湿気った声だった。

「ねぇあきら〜。ひ〜ま〜」

俺の名前を呼んだ張本人である理子がゴロゴロと床に寝転びながら、我が家のペットである一匹の猫とねこじゃらしを使って遊んでいた。この猫は〝チョコボール〟と言って、俺がイギリスから連れてきた唯一のペットだ。本当は全てのペットをこちらに運びたかったのだが、生活環境がガラリと変わるとなると彼らの面倒を全面的に見れる保証がなくなる。そんなあやふやな状態でペットたちを世話できると断言はできな

かったので、それで仕方なく他の動物は全て、とある貴族に引き取ってもらった。昔、依頼で知り合っただけの仲なので、ほとんどダメ元の頼みだったのだが、その人物は俺の頼みを快く引き受けてくれたのだ。全ての動物を連れて行きたいと理子はかなり駄々をこねたが、こればかりは仕方がないと理子を説得し、彼女と一番仲が良かったこのチョコボールだけをこちらへ持ってきたのだ。そんな経緯があり、今はこの年老いた猫一匹だけを飼っている。

「暇だよ～あきら～」

それで何か絆が生まれたのか、理子とチョコボールは同じように体を伸ばして丸太のようになり、並んで地面に転がり始めた。

「……暇なら理子、雨漏りしまくっているこの家を何とかしてくれないか？」

そう言って俺は視線を水の貯まった桶に向けた。そう実はなんとこの家、俺たちが住み始めて二年がたったある日、急に雨漏りし始めたのだ。老朽化が進んでいたとは言え、もうここまでガタが来ているとは思いもしなかった。本当なら屋根の修理を俺が急いでするところなのだが、記録的雨量が計測されている今、一人出て行って修理をするわけにはいかなかった。素人の俺が修理をしてもし屋根を破壊してしまったら、それこそ家を駄目にしてしまう。さらに言えば、俺が足を滑らせて大怪我を負うわけにはいかない。武偵が何を言っているのかと思うかもしれないが、俺が理子と二人だけで暮らし

ている手前、大きな怪我をするわけにはいかないのだ。
「えぇ～。これ面白いからずっとこのままにしとこうよ」
「ダメだ雨漏りを許すとそこから家が腐っていくんだ」
家のことでなく、面白いか面白くないかで良し悪しを決める理子に俺は呆れ、彼女をそっと腕の中に収める。その時だったーー。
「あきら、誰か来た～」
チャイムが家の壁や床を伝って鳴り響く。その来訪者を知らせる合図に、少なからず俺は驚いた。
「こんな所に、この天気で誰か来るとはな」
俺はゆっくりと腰を上げ、玄関へと向かう。ギシギシと軋(きし)む床を進み、目的の場所に着くと、俺は玄関扉を開け放った。
「おお！久しぶりだな、筒香(つつごう)！」
そこには元上司が豪快な笑いと共に立っていた。

俺が思っていたより雨は激しかったようで、カールさんの着ている藍色のスーツは、所々水分を含んで変色していた。靴も一度、水に浸したのかと思ってしまうほど濡れている。滴り落ちる水がコンクリートで作られた玄関床に落ち、水玉を一つ生み出した。俺はカールさんにタオルを数枚渡し、これで頭と足を拭くように言った。

「いや～悪いな筒香。本当はこんな日に押し掛けるのは迷惑かと思ったんだが、この日しかスケジュールが空いてなくてな」

カールさんは玄関に足を下ろし、廊下に座ってタオルで頭を拭く。

「休みって、わざわざ俺に会うために日本に来たんですか？」

驚いた俺は少しだけしゃくり上げたようにカールさんへと尋ねた。

「ガハハッ、思い上がるな筒香！たまたま仕事で日本に来ていて、そこで休みが取れたのが今日だったんだ。お前が日本に行って以来、一度も会ってなかったから良い機会だと思ってな」

なるほどと俺はカールさんの発言に納得する。そんな合間にもカールさんは粗方体を拭き終えたようで、ふうっと口から息を一つ吐いて、自分の濡れた靴を見つめていた。俺はカールさんを中に案内し、リビングの一席に腰を降ろしてもらった。それから冷たい麦茶が入ったグラスを二つ持って、カールさんの前に座る。

「こうしてお前と話をするのは二年ぶりだが、懐かしい感じはしないな。まるで会社通いしているうちに顔馴染みになってしまったドーナツ屋の店主と話しているみたいだ」

それには俺も全くの同意見だった。俺が毎日、カールさんの元で働いていた時と変わらないように感じる。ここはイギリスで、本当は日本に移住していないのではないかとさえ思えるほどだ。カールさんは俺が置いたグラスを持ち、中に入っている麦茶を口の中へと勢いよく流し込んだ。そしてそれからは俺の目を見てこう切り出す。

「実はな、今日お前に会いに来たのはお前が拾った子供の顔を一目見ようと思ったからだ」

「……知っていたんですか？」

俺は一瞬だけ目を見開いて、カールさんにそう尋ねた。

「ガハハッ！俺を誰と思ってるんだ筒香（つつこう）」

そうだ。二年も離れていたからか、忘れていたのかもしれない。カールさんは武偵世界では有名な武偵だ。強襲科（アサルト）、探偵科（インケスタ）そして情報科（インフォルマ）においてSランクを取得。その他も全ての技能がAもしくはBランクと言う化け物なのだ。そんなカールさんが、俺の口にしていない内情を一つくらい知っていたところで、さして驚くほどのことではないのだ。俺はそうでしたと小さく呟くようにしてカールさんにそう言い、家全体に届くように、はりのある声を挙げた。

「おい理子！ちょっと来てくれ！」
カールさんに理子を紹介しようと、彼女の名を呼んだのだが、一向に姿を現さない。
「理子？」
もう一度、今度は困ったように名前を呼ぶと、扉がガチャリと音を立て、半開きになったドアの影からにょきっと理子は顔の一部だけをこちらに覗かせていた。その少しだけ見える表情から、不安げな感情が読み取れる。どうやら見知らぬ男にかなり警戒しているらしい。同年代の子供には自分から積極的にコミュニケーションをとろうとするのに、どうも大人に対してはそうではないらしい。いや、大人と言うよりは無駄に普段から威圧感で空気を圧迫しているカールさんにと言った方がいいだろう。近くの八百屋のおじさんには自分から話しかけていたから、恐らくそれが正しい。
「大丈夫だ理子、こっちに来い」
俺はちょいちょいと理子に向かって手招きをした。すると理子は少し躊躇（ちゅうちょ）した後、何かのタイミングを計るように俺とカールさんを交互に見て、急ぎ足で俺の背中へと駆け寄って隠れた。
「……これが例の子か」
「はい、理子と言います。……理子」
俺は理子に挨拶するよう促した。理子は俺の背中に隠れていたが、ゆっくりとずれる

ようにして俺の横に並んだ。まだ片手は俺の服の二の腕付近を摘まんでいる。
「……こんにちは」
「これはこれは御丁寧に、こんにちは」
理子はペコリと深く頭を下げ、カールさんもそれと同じように頭を下げた。俺はよくできましたと、理子の頭を一頻り撫でた後に彼女を持ち上げ、自分の膝に座らせた。
「筒香。お前と違って、随分と礼儀正しい娘じゃないか」
「何を言ってるんですか?俺の教育の賜物ですよ。なぁ理子?」
俺は理子にそう尋ねたのだが、まだ緊張しているのか、理子は小さく頷いて、すぐに固まってしまった。
「ガハハッ!大丈夫だ、そう固くならんでいい!俺なんてチワワみたいだものだ。チワワと思って接してくれ」
そうしてまたカールさんは大声で笑う。その声の大きさに理子はビクリと体を反応させ首をすくめた。そして俺の右手を力いっぱいにぎゅっと両の手で握ってくる。理子の反応を見る限り、カールさんはチワワと言うよりはグレート・デン（世界最大の犬種）なのだが、それを言ったらカールさんに怒られそうなので、俺はそれ以上何も言わないでおいた。

「バンバン！」
「ぐふぁ！やられた！」
「やった！理子の勝ち！」
　窓から弾ける雨音に混じり、後ろでそんなやり取りが聞こえてくる。それは他の誰でもない理子とカールさんのものだ。初めこそ理子もカールさんを警戒していたが、この少しの間でもう二人で遊べるまでには彼らの距離は縮まっていた。打ち解けるのが早すぎると言うかなんと言うか……。だが考えてみれば、元々積極的に人と接しようとする理子と、誰にでも慕われる人格者のカールさん。切欠（きっかけ）があれば二人がこうなるのは必然だったのだろう。今では楽しそうに謎の遊び（武偵ごっこ？）を繰り広げていた。俺はそんな微笑ましいやり取りをＢＧＭにしながら、三人分の昼食を作っていた。仕事のついでとは言え、わざわざ海を越えて会いに来てくれたカールさんに、せめて昼食くらい食べていって欲しかったのだ。俺は簡素な料理しか作れないとは言え、これまでの恩返しを含めて、なるべく美味しくなるように努力した。

「……よし、できた」

俺は一人そう呟いて、後ろで遊ぶ二人の名前を呼んだ。

「ほぉ、お前がここまで料理を作れたとはな」

並べられた皿たちを見て、カールさんは感心したように言った。確かに二年前の俺からすれば考えられない。

「次は理子が作ってあげる！」

「おお！それは楽しみだな！」

どうやらもう理子はカールさんを恐がることはないようで、今では彼の膝の上にちょこんと嬉しそうに座っていた。あまりの体格差で、理子が玩具の人形に見えてしまう。そんな二人と共にする食事は、全ての皿をならび終えてすぐに始まった。メニューはオリーブオイルを使った野菜炒めや、味噌汁、その他日本に馴染みのある料理ばかりを用意した。どれもカールさんは美味しいと言って食べてくれて、俺はそれに対し笑顔で答えた。

俺とカールさんが落ち着いて二人で話を始めたのは昼食を終えてすぐだった。理子は昼食を作り終えるまでずっとカールさんと遊んでいた反動か、今ではぐっすりとソファーで寝息をたてていた。雨音はまだ止まず、彼女の寝息を強引に掻き消す。そんな中でまず始めに話を切り出したのはカールさんだった。

「筒香。俺はお前がとある少女を保護したと知り、個人的にその少女について調べてみた」

カールさんの手元には食後のコーヒーが置かれており、その湯気が緩やかに曲線を描きながら立ち昇る。

「しかし該当する者は無し。まぁ本気の本気で探していないとは言え、それでも手がかりの一つも掴めないのは流石に驚いた。まるで誰かが意図して情報を伝えないようにしているかのようでな」

「意図して？」

「まぁ、あくまで経験則と勘からな」

俺は知っている。カールさんがここまで口にすると言うことは、それはほぼ確定された事実なのだと。今まで俺が彼の下にいて学んだことの一つだ。

「まぁ前置きをごちゃごちゃ言っても仕方がない。単刀直入に言う」
　カールさんは少しだけ、息を長く吸って一拍置いた。そのほんの少しの間が、俺にはどうしようもないほどに引き伸ばされたように感じる。未だに耳を騒がせる雨音に紛れてカールさんは言い放った。
「筒香。『峰理子(あの娘)』を手放せ」
「……なぜですか?」
「お前も馬鹿じゃない。既に分かっているだろう?」
　分かっている。確かに分かっている。恐らくカールさんよりも。何せ俺は一度、シャーロック・ホームズと名乗る男に忠告されているからだ。
『もし君が日本に行かなければ、ちょうど1週間後に死ぬことになる。いや、殺されることになると言った方がいいかもしれない　』
　言うなれば、俺が理子と共にいる結果、生まれる〝死〟の可能性。そして『峰理子』と言う少女が抱える〝因果(やみ)〟。それらを俺は今、頭の天辺から足の爪先まで全身どっぷり浸かっていると言うことになる。
「……分かってますよ。分かってます」
　俺は自分に言い聞かせるように言葉を重複させる。
「分かってるのならなぜ、手放さない。今はまだ大きな出来事は起こっていないが、これ

から先もそうとは限らない。『峰理子』ーー彼女は何かしら大きな面倒事(爆弾)を持ち歩いている。いつそれが爆発するか分からんぞ」

カールさんの低く重い言葉が俺の体内を暴れ回る。音の波が俺の胃や腸、肺に伝わり心臓の鼓動と重なり消える。俺はそれを同調させるように、自分の喉を震わして声を出す。その声はカールさんとは違い、浅く軽いものだった。しかしそれでもここでカールさんの忠告を受け入れる訳にはいかなかった。その答えはもう二年前に決着しているのだから。

「カールさん。確かに理子を手放した方が俺の身は安全かもしれません。ですが、カールさんは知らないでしょう。彼女が、理子がどんな格好で俺と出会ったのか。どこに居たのか」

そうだ。彼女と会ったのもこんな雨の日だ。ただただ煩(うるさ)くて、耳障りとしか言い様のないこんな雨の日。

「理子は一人、雨風を凌(しの)ぐために橋の下のトンネルに居たんです。彼女は何も着ていなくて、傷だらけの身を薄汚れた布一枚で包んでいました」

彼女は布を頭から被って体を三角形に丸め込んでいた。痩せて細くなった手足を少しでも暖めようと。

「理子には自分を守ってくれる存在がいないんです。服を着せてくれる人も、ご飯を食

べさせてやる人も、辛いときに側に居てやれる人も誰一人いなかった」
俺はカールさんの鋭く青い目を真っ直ぐ見つめる。彼の目は俺を圧倒するような重圧を含んでいた。
「ここで俺が理子を手放せば、また理子は一人になる。それだけは何があってもできません」
俺とカールさんの間に少しの沈黙が生まれる。雨の音が一層、際立って聞こえた。
「……それがどれ程危ない事だとしてもか？」
「はい」
「……死ぬかもしれんぞ」
「武偵に今更なにを言ってるんですか？」
そこで言葉の応酬が途切れる。互いに互いの顔を見て、言葉を紡ぐ。それは端から見れば牽制し合う、武偵同士の訓練風景に見えたかもしれない。それほどまでに、この場の空間は膨張しきっていた。しかしそれはカールさんが口を大きく曲げ、にかっと真っ白な歯を見せた事により急激に萎み、収束していった。
「そうか。なら俺からは何も言うまい」
カールさんは手元にあるコーヒーを持ち上げて口へと運んだ。カップの側に置かれた砂糖とミルクは、封を切らずにそのまま忘れ去られたように置かれていた。

「お前のそんな意志の籠った目、初めて見たぞ」
カールさんにそう言われて、イギリスにいた頃を思い出そうとするが、頭に浮かんだのはただアパートにいた数々の動物たちの姿だけだった。
「……そうですかね？」
「ああそうさ」
俺も自分のコーヒーカップを掴み、その中身を口内へとそっと注ぎ込む。そのコーヒーは茶色がかっていて、そして少しだけ甘かった。
「いい男になったな、筒香（つつごう）」
カールさんの笑い声が室内へと飛び交（か）う。その声は今日一番の大きさで、雑音すら許さないその声のせいか、ふと雲をすり抜け窓を貫いた光が、そっと俺へと差し込んだ。

玄関に描かれた水玉はもう綺麗にぬぐい去られていた。カールさんは玄関に並べられた中で一際大きい靴へと再び足を突っ込む。濡れたその靴がカールさんの足と擦れ

て独特の効果音を鳴らした。
「おじさん帰っちゃうの?」
　理子は俺の隣で、寝起きのせいで脱力している目を擦っていた。
「ああ、ちょうど雨も止んだからな」
　そう言ってカールさんは、ちらりと玄関窓を見た。ここ最近、雨続きだったこの期間で晴れ間が顔を出したのは幸運以外の何でもなかった。そんなカールさんの返答を聞いた理子は、しょぼんと頭から生えているサイドテールを萎(しぼ)めさせた。
「ガハハハ、そう悲しそうにするな!また遊びに来るからな。もしくは遊びに来てくれてもいいぞ。その時は愛する我が子供たちを紹介してやろう」
「……ほんと?」
「ああ、約束しよう」
　カールさんは腕を曲げ、力こぶを作って理子に答えた。筋肉がスーツを押し広げ、布地が裂けはち切れそうになる。
「約束!」
　理子もカールさんの真似をして力こぶを作ろうとするが、彼女が作ったのは服の二の腕部分に深い陰を刻むシワくらいだった。
「よし、それじゃあそろそろ帰るとする。明日の仕事もあるからな」

カールさんはトントンと靴の先を地面へと二回打ち付けて、首だけをそのままに俺たちへと背を向けた。
「はい、お疲れさまです」
それにカールさんは手を挙げて答える。そんな彼の背中は、とても大きくてたくましく、そして雨で少しだけ濡れていた。
「……カールさん」
「ん？」
「ありがとうございました！」
俺は頭を下げる。それはイギリスにいた頃お世話になった事に対して、ここに来て俺たちの様子を見に来てくれたことに対して、そしてーー

ーー俺なんかの身を案じてくれたことに対して。

「……あぁ、元気でやれよ」
その声は彼らしくもなく細々として小さく、とても弱々しく感じた。その後カールさんは、よく現状を理解していないが、俺の真似をして取り合えずと言ったように頭を下

げる理子の元へ近づいて、そして大掛かりな動作で足を曲げ、しゃがみ込んだ。
「理子ちゃんも、筒香と仲良くしてやってくれ」
次いでカールさんは理子の頭へと手を乗せて笑った。理子は下げていた頭を起こして、カールさんへと笑い返す。カールさんがしゃがんでもなお、理子とカールさんの背丈に対する順位が逆転することはなかった。
「うん、仲良くしてやる！」
「ガハハッ！ああ、頼むぞ！」
カールさんは立ち上がって、再び背を向ける。彼の手が扉のノブへと伸ばされる。カールさんの手にかかれば、そのドアノブでさえどこか小さく見えて仕方がなかった。
「じゃあな、仲良しさんたち！」
そう言ってカールさんは扉を開け放ち、その向こう側へと姿を消した。ガチャリと言う音を最後に、急に辺りが物静かになる。もう雨音も笑い声も俺の鼓膜を震わすことはない。しばらく静寂が続き、それからふと理子がぎゅっと俺の手を握ってきた。
「……どうした？」
「抱っこ！」
理子は満面の笑みを浮かべながらそう言う。そんな理子の笑顔は、どこかカールさんに似ている気がした。

「仕方ない奴だ」

俺は理子を抱き抱える。その体重は二年前に比べると随分重くなった。耳元で嬉しそうな歓声が聞こえて、それと同時に理子は俺の方へと体を寄せてきた。彼女の両腕が俺の首へと巻き付いてくる。

「なっ、ちょお前くっつき過ぎだ。暑いっての」

しかし理子は聞いていないと言わんばかりに、むしろ先程よりさらに体を密着させてくる。俺は諦めて、体を振り向かせ廊下を歩き始める。俺と理子の二人から掛かる体重により軋(きし)む廊下の上で、ふとカールさんの笑い声がまだどこか部屋の隅(すみ)にでも引っ掛かっているのではないかと、そう思って耳を済ませた。しかし聞こえてくるのは、理子から俺の体を渡って伝う彼女の心音だけだった。

その晩、天気予報のキャスターは、胸を張るようにして梅雨が開けたとそうテレビの中で宣言した。

水も滴る良い女

　その日は暑かった。ジリジリと焼けるような日差しがアスファルトを燃やしている。目の前が歪んで見えるのは単なる自然現象なのか、それとも俺の頭がそうさせているのか。どちらにしても、この燃えるような暑さが原因なのには違いなかった。俺の隣を歩いている理子も、ふらふらと麦わら帽子越しに揺れる頭の具合を見るに、そうとう参っているらしい。今繋がれているお互いの手にある汗は、もうどちらのものか分からない。

「理子、もうすぐだから踏ん張れ」

「……うん」

　気の抜けた、淡泊な声が返ってくる。それは本当に俺に対して返事をしたのかさえ怪しく思えるほどだ。もしかすると、彼女を迎えに来た死神に対して返事をしているのではないか？なんて思ってしまう俺も相当参っているようだ。そんな状態の中、俺たちは歩いた。どれくらい歩いたのかは覚えていない。俺の記憶している住居区内なので、短い距離なのは間違いない。それでも相当な距離を歩いたように感じた。しかし、やがて見えてきた立て看板が完全に視界に入った時、俺はこの旅の終わりを悟ったのだ。

『小学校プール公開日』

その看板にはこう書かれていた。

それはポストに入っていたチラシから始まった。その時の俺たちは、全身がアイスのように溶けてしまうのではないかと錯覚する暑さの中、クーラーが殆ど効かないこのアパートのせいで、二人して干からびたトカゲの様な状態で床に張り付いていた。そこでたまたま目にしたのが『小学校プール公開期間！』と言う手作り感漂う一枚のチラシだったのだ。読んでみるに、近くの小学校にあるプールを夏の数日間、一般公開すると言うものだった。と言っても対象は小学生以下であり、それ以上は子供の付き添いと言う名目でしか立ち入れないようになっていた。理子はこの暑さがどうにかなるのならと言う単純な理由で参加を決定し、俺も理子に託(かこ)つけて少しは涼めるかと思い同伴することにしたのだ。

「うわ〜！理子、学校に入るの初めて」

小学校の門を抜け、しばらく歩いたところで理子はぐるりと周囲を見渡した。初めて入った学校に興奮している様子だ。そのお陰で、どうやら少しは気力が回復したようで、口から発せられる声にもそれがはっきりと伝わってくる。そんな理子の様子を見て、一つの思いが俺の胸から沸き上がる。

（……やっぱり理子も小学校に入るべきだよな）

理子にもちゃんと、同年代の友達が町内にいるとは言え、やはり学校にいると言う意味は大きい。勉強についてではない。そうではなく人と接する意味や、思い出を作ると言った部分でだ。しかしそれは今ここで考えることではないかと思考を打ち切る。近場とは言え、この暑さの中死にそうになりながらもここまで来たんだ。今は今、理子のためになることをしよう。そう思って俺はくるくると回りながら移動する理子の後を追った。

俺と理子は点在している案内板の指示に従い、校内を歩き続けた。懐かしい風景に思わず辺りを伺い、右へ左へ視線を漂わせている俺の姿は、きっと小学校に侵入した不審者にしか見えないだろう。理子から離れれば俺の元に同僚の武偵が飛んでくる。それだけは勘弁したい。そんな俺の馬鹿らしい思考を打ち消すように、ふと甲高い誰かのはしゃぎ声が耳に響いた。それは道を進めば進むほど大きくなっていき、やがて目に見える形となって判明する。目にした風景は緑色に塗られ、コーティングされた金網越しに、大量の水が貯まっている様子だった。その中で子供たちがばちゃばちゃと水鳥のように音を立てて水飛沫を上げている。随分と大きなプールだ。始めに思った感想がそれだった。想像していたより一回り大きい。小学校のプールとはこんなに大きかったか?そんな疑問を持ちながらも、俺は目を輝かせながら更衣室に向かう理子を見届け、一人プールサイドへと足を運ぶ。ツンと軽い塩素の臭いが鼻に届いた。奥では俺と同じような理由で来たであろう保護者たちが今日の暑さ証である汗をびっしょりとかいていた。しかしよく見てみれば、ここに来ている保護者は皆、女性ばかりで俺のような男は誰一人としていない。俺はなんとも言えない居心地の悪さを感じながらも、理子が更衣室から一刻も早く出てくるのを願った。

「お待たせ、あきら!」

待ちわびた声と共に更衣室から出てきたのは、レモン色で統一されたワンピース型の

水着を身に纏(まと)った理子の姿だった。パステル調の明るい色が、理子の金髪と相俟(あいま)ってよく似合っている。

「……あれ？なんであきら着替えてないの？」

こちらに駆け寄ってきた理子は、俺の姿を見てこう言った。

「いや、小学生のために開いたプールに俺が入ったら不味いだろう」

チラシには保護者は入ってはいけないと書いてないが、普通こう言ったものに大人は混じらないものだ。もし入ってしまったが最後、子供たちのテンションを下げるばかりか、保護者の冷たい目線が俺を差すことは避けられない。今、俺の肌を濡らしている汗が、心なしか少し干上がった気がした。しかしそんな事情は知らんとばかりに、理子は俺が一緒に入らないことに口を尖らせた。俺が一生懸命に説得しようとしてもブー垂れている理子は、こちらの意見に耳を貸さない。ならばと俺は少し方向性を変えてみた。

「そもそも俺は水着なんて持ってきてないから入れないんだ」

「え～っ！プール行くのに水着持ってきてないなんて、あきらは馬鹿なの!?」

「……お前なぁ」

俺は理子からの酷い言われように思わず苦笑して頬をかく。

そんな時だった……。

「……ふっ、ふふふっ、ふふっ」

俺たちの近くにいた一人の女性が口に手を当てて笑いを押し殺していた。その様子を見ていた俺と理子は、呆気に取られ、会話を中断して彼女の方を呆然と見ることしかできなかった。

「ふふふっ、申し訳ありません。あまりにも面白かったもので」

女性は一頻(ひとしき)り笑い終えたのか、口に当てていた手を日傘を支えていたもう一方の手に添えて、こちらに向き直る。そして一拍後(のち)に女性は頭を下げた。

「間宮みすずと申します」

「あっ、これはこれは。筒香明(つつごうあきら)です。そしてこちらが理子です」

女性の唐突な自己紹介に、俺は無意識的に反応し、自分と理子の名を明かした。俺は下げていた頭を上げる。そこでやっと彼女を視覚することができた。間宮みすずと名乗った女性は、日本人らしい淑やかな雰囲気を持っていた。顔はとても幼く見え、少し丸みをおびた童顔だ。恐らく母親なのだろうが、どちらかと言うと姉と言われた方が自然だ。女子高生、いや人によっては女子中学生と言っても信じてしまうかもしれない。しかしその佇まいや一つ一つの動作に謙虚さが現れており、それは間違いなく彼女が大人の女性だとを表す証明としては十分だった。　大人と子供が合わさったような不思議な空気を持つ女性。それが俺の彼女に対する第一印象だった。

「理子ちゃん……ですか、いい名前ですね」
　それは俺に言ったのか理子に言ったのか。もしくは俺たち二人に対して言ったのか。俺には分からなかった。しかし彼女の目線は俺の顔に向いていた。
「……理子、プール入っていいぞ。遊んでこい」
「ほんと？」
「あぁ、しっかり準備体操しとけよ」
「分かった～！」
　理子はそう変事をして、向こう側のプールサイドへと移動していった。
「……お利口な娘さんですね」
　間宮さんは、理子の方を向いてそう言う。
「それはどうか分かりませんけど、俺よりは賢いかもしれませんね」
　そんなやり取りの後、俺は間宮さんと共に子供たちが遊ぶプールを見やりながら話を始めた。もしかするとこの猛暑日の中、ただ一人で何もせずに子供を見守り続けるのにうんざりしていたのかもしれない。それはどうやら俺も同じだったようで、本来饒舌（じょうぜつ）ではない俺自身も、今日は妙に口が回った。異常な暑さを誤魔化すように飛び出す言葉は、まるで壊れたラジコンのようにふらりふらりと辺りを彷徨（うろつ）いた。
「間宮さんもお子さんをここに？」

「はい、あかりと言う娘を。本当は下に妹もいるのですが、小学生用のプールに連れていくには少し早いかなと思いまして」

確かに。どちらか一人ならともかく、二人となるともし何かあった時に、対処が難しくなる。まだ小さい子なら尚更のことだ。

「ほら、あの子なんです」

間宮さんはそっと手である一点を指し示した。そこにはオレンジの明るい髪色をした女の子が友達数人と共に遊んでいた。恐らく理子より年下だとは思うのだが、まだこの頃は体の成熟具合によって変わってくるので正確には分からない。

「とても元気なお子さんですね」

「はい、少し元気すぎて困っているくらいです」

しかしそう言う間宮さんの顔は嬉しそうに微笑んでいた。俺も思わず彼女に笑い返す。

「うちの理子もそうなんですよ。好奇心が旺盛で、よく男の子と混じって遊んでいます」

それから俺は一瞬、言葉を切る。次に出す言葉を躊躇ったからだ。今日会ったばかりの人間に、自分の内情を話していいのだろうか、それに対して少しの葛藤を覚える。それでも間宮さんなら、何も気にせず話を聞いてくれるのではないかと、先ほど会ったばかりの女性に確信とも言える一方的な期待を何故か俺は持っていた。

「……理子は私以外に親がいないんです」
　気づいた時には口が開いていた。心臓から抜け出し、肺に溜まり、そして食道を登って口から溢れ出す言葉に押さえが効かなくなった。それは俺の意思とは関係なく込み上がってきて、そしてたまらず俺は彼女に向かって吐き出した。
「理子には両親がいない。そもそも私は本当の親ですらありません。孤児だった理子を、俺が引き取ったに過ぎないんです」
　間宮さんは静かに黙って俺の話を聞き、こちらをじっと見つめる。もし蝉の鳴き声に紛れて時折聞こえる彼女の息遣いが無ければ、本当に存在しているのかどうかさえ分からないほど彼女は静かだった。それは砂場で遊んでいる我が子を遠くから見守っている母親の姿のようだった。
「俺が孤児だったからか、とにかく理子を放って置けなくて、俺は理子と暮らし始めました。だから恥ずかしながら俺がこうして理子を育てているのが不安なんです」
　俺は流れるように出た言葉に終止符を打つため、手に持った水筒から水を一口喉へと流し込む。すっかり温(ぬる)くなってしまった水筒の中身が、今日の凄まじい暑さを物語っていた。
「……私はいつも思っているんです」
　俺の話を最後まで聞いてくれた間宮さんは、プールで遊ぶ子供たちを見ながら話を始

めた。

「上手に生きてくれなくていい。頭が良くなくていい。運動ができなくたっていい。ただ真っ直ぐに生きて欲しいんです。そして同僚を、友人を、そして仲間を、力の無い人々を守ろうとするそんな優しい子に育って欲しい」

間宮さんは柔らかい口調を崩さずにそう言う。しかし彼女の発する言葉は力強く、芯をしっかりと持っていた。俺のような、自分で制御すら出来ないで、勝手に飛び出すような、幼稚な言葉とは違う。そんな時、俺はふと自分の奥底に懐かしい感情があるのを感じた。それはまるで昔、ベンチにでも置き忘れた忘れ物を見つけたようなーー。

ーーあぁ、そうだ。

前にもこんな事があった。忘れ物の輪郭がはっきりと見えてくる。かかった霧が晴れて、姿を現す。そう、俺は憧れているのだ。そして羨ましいのだ。間宮さんのその強さが。その真っ直ぐさが。餓鬼の頃、本の中に閉じ込められたあの男に憧れたように、俺は間宮さんを羨ましいとそうーー。

「……ええ、なりますよ。きっと、そんな娘に」

間宮さんを見ていれば分かる。真夏に咲く向日葵のように、一つの太陽に向けて真っ

直ぐ、そして一生懸命に進む。彼女の娘はそんな娘になるのだろうと。そこでふと俺は思った。いったい俺は理子にどんな人間になって欲しいと思っているのだろうか？俺は今まで、思い立ったままに自分にできることをしてきた。しかし本当にそれは理子の為になっているのだろうか？俺はこのまま理子を育ててもいいのだろうか？そしてーー

ーー理子は俺といて幸せなんだろうか？

その疑問を、自分に対し問いかけてみた。しかし返事は返ってこない。暗闇で反響した言葉が虚しく空気に溶け出す。いや、分かっていた。俺一人でいくら自問自答しても答えなど返ってくる筈はないと。知っていた。そんな馬鹿馬鹿しい思考をする度に、自分がどうしたらいいかと迷い続ける事に。だがそれは、唐突に放たれた彼女の言葉によってほんの少しばかり変えられた。

「……理子ちゃんは幸せですね」

「……えっ？」

その言葉を聞き、俺は驚きのあまり両目と口を見開き、間抜けな声を出した。自分に問いかけた言葉が、隣にいる彼女に聞こえていたのかとそんな錯覚を起こし、ありもしない困惑と気恥ずかしさが一気に込み上げてきた。しかし間宮さんはそんな俺にお構いなしと、微笑んで言葉を続けた。

「だってこんな素敵なお父さんと一緒にいれるんですもの。きっと理子ちゃんは、幸せですよ」

「……お父さんか」

それは咄嗟出た言葉だった。単なる照れ隠しだったのかもしれないし、次の言葉を繋ぐための時間稼ぎだったかもしれない。なぜ俺がそんな言葉を発したのか。それは自分にさえ分からなかった。もしかすると、先程吐き出した物の残りが口から漏れたのかもしれない。

「私は今日、初めて理子ちゃんと明さんに会いましたけど、それでも血の繋がりなんて関係ないほどの親子愛がひしひしと伝わって来ましたよ」

間宮さんが心の底からそう言ってくれるのが俺には分かった。

「……間宮さんにそう言って貰えると、とても嬉しいです」

そこで俺はふと視界の隅で二人並んで手を振る、理子とあかりちゃんが目に入った。どうやらこの短時間で友達になったらしい。俺は間宮さんと顔を合わせ、お互いに笑みを浮かべてから、そっと彼女たちに手を振り返した。

空はすっかり茜色を帯びて、降り注ぐ光は地面を明るく照らし出す。そんな時間帯にも関わらず、昼間と比べても、その暑さは幾分も変わっていなかった。しかし隣を歩く理子は、行きに比べれば少しだけ元気そうだった。そんな理子がふと俺のシャツの袖をぐいっと引っ張る。

「ねぇあきら、おんぶ」

足を止めた瞬間、理子が俺に向かってそう言う。

「暑いぞ？」

「いいのいいの」

「俺が良くないんだが……。」

きっとよく遊んだから疲れたんだろうと思い、俺は理子の前でしゃがんで背中に乗るように促す。次の瞬間には背中に軽い衝撃が来て、俺の首に掛けられた理子の腕からプールで冷えたであろう彼女の体温が伝わる。俺は立ち上がって、理子を背負いながら再び足を動かし始める。理子は汗まみれであるはずの、俺の背中に頬をグリグリと押し付けてくる。

「むふっ、あきら汗臭〜い」

「やかましい」

それから理子はただ黙って俺に体重を預けた。俺もしばらくは、ただひたすら無言で足を動かしていたのだが、ふと今日の出来事を思い出して口を開いた。

「……なぁ理子」

「ん？」

「お前はーー」

ーーお前は俺といて幸せか？

その一言が言えない。唐突に口がつぐまれる。言おうとして、唇が必死に俺の言葉を塞き止めようと互いに手を取り合う。俺は言葉が詰まってそれを腹に押し込んだ。

「……いや、何でもない」

「え～っ！そこまで言ったんなら教えてよ！」

耳元で理子の甲高い声が発せられる。少し耳がキンと鳴りながらも、俺は話を誤魔化すために話題を切り替える。

「まぁなんだ、今日は楽しかったか？」

「うん、でもやっぱり理子はあきらと入りたかったな～」

理子は少しむくれながらそう言う。

「……そうか、なら今度は一緒に海にでも行くか」

「やった！約束！」

「……ああ、分かった。約束だ」

理子がはにかむ。今はこんな子供らしい表情を見せる理子も、いつか間宮（彼女）さんのような、そんな水も滴る良い女になる日が来るのだろうか？そんな下らないことを考えながら、俺は理子を背負って帰路を歩いた。

虫とりと駄菓子屋

〝虫とり〟

俺は昔、そう呼ばれるものよくをしたものだった。この年になっても心に刻まれたあの風景は、俺を童心へと返らせる。地表を焼け尽くすような日差しの中、虫かごと虫あみだけを持ち、森や林の中を駆け回った。頭に葉を乗せ、カブトムシやクワガタをかご一杯にして帰路を歩いた。そんなに捕まえても飼えない分は逃がすしかないのだが、ただかごを虫たちで一杯にして、それを眺めるのが好きだった。それはまるで自分が集めた特別な勲章のようで、俺はその勲章を誰かに自慢したいとよく思ったものだった。まさか俺がこの年でそんな何気ない少年時代の一ページを開き直すとは思いもしなかった。と言うのも、そうしたのは理子のとある一言が切っ掛けだったからだ。

「あきら、カブトムシ取りに行きたい」

「……ずいぶんと唐突だな。どうした？」
俺は仕事の書類を纏めるために動かしていた手を止めて、そう言った理子の顔を見た。
「近所の男子たちが自慢してくるの。カブトムシ見せてきていいだろうって……」
なるほど、そう言うことか。まぁそれは仕方がない。子供にとってのカブトムシとは、大人にとっての金銀財宝と同じようなものだ。その男の子が自慢したくなる気持ちは分からなくもない。
「それで、理子もカブトムシが欲しいと？」
「うん！だから一緒に取りにいこう！」
そう言うことなら否定する理由はない。かつて『虫野郎』と呼ばれた俺の技術を見せてやろう。
「よし、なら次の休みの日に行くか」
それに対し、理子は笑顔で力強く首を縦に振った。そうして俺の本能とも呼べる記憶が蘇ったのだった。

俺たちが住んでいるアパートの裏には小さな林がある。お世辞にもしっかりと整備させているとは言えないが、それでも一応人が通れるように、申し訳程度の小道は作ってあるのだ。そこを進むと細々とした山の入り口が見えてくる。そこは小さな山で、俺がゆっくりと登ってもわずか二十分足らずで山頂にたどり着いてしまうほどの小ささだ。しかしそれでも自然は豊かで、気分転換にとたまの休日に俺は理子と共にこの山を何度か登ったこともある。そんな俺たちにとっては身近な山は、真夏日だと言うのに澄んだ空気と木々が作る影の影響で暑さは全く感じない。むしろ少し寒いと思えるほどだ。

「あきら、ここにカブトムシがいるの？」

辺りは木ばかり。ぱっと見た中では、虫などいない。そう思ったのだろう。理子は不安げな声と共に俺を見上げた。

「あぁ、この森のどこかに奴らの好きな木があるんだ。そこに引っ付いている可能性が高い」

それを聞いた理子は首をかしげて俺を見上げた。

「カブトムシって木を食べるの？」

「いやいや、樹液を食べるんだよ」

「樹液？樹液って何？」
　そう言われて、なんと説明したら良いのかと俺は無い頭を捻り出してしばらく考えた。
「う～ん、そうだな。簡単に言うと俺にも理子にも血が流れてるだろ？当然、木にも血が流れててだな、カブトムシはそれを吸って生きているんだ」
　うん。生物学的には全く違うが、子供に対する説明としてはいい答えではないだろうか。
「そうなの!?じゃあカブトムシは蚊と一緒なんだね！」
　しかし、理子は俺の説明を歪曲して捉えてしまったようだ。虫世界の中でも嫌われ者の蚊と人気者のカブトムシでは天と地ほどの差があるのだが、それはカブトムシを捕まえていけば分かってくれるだろうと、俺は理子の言葉に苦笑で答えた。そんなやり取りをした後、俺たちはひたすら山を登って、その中腹辺りで足を止めた。ここらは坂もあまり急ではなく、見晴らしも他の場所より少しだけ良かったからだ。これならば、多少理子が単独行動をしても問題はない。
「さて理子。さっきも言ったが、カブトムシは樹液を吸って生きている。故(ゆえ)に適当に木の上を探せば見つかる……なんて甘い考えは捨てろ」
「捨てるの？」

「ああ。奴等(やつら)は近年姿を減らしている。俺がガキの頃は近所の公園にいた時もあったが、今はもうそんなことはまずあり得ない」

そう。それは彼らの住む自然が根こそぎ減っていると言う理由もあるが、山の周囲に住居が建てば、その光につられてカブトムシはそっちに移動してしまう。そしてそうなれば当然、些細なことでカブトムシは死んでしまうのだ。そんな理由もあって、カブトムシを見かけることは少なくなっていったと思われる。昔は公園にいたこともあったのかと言わんばかりに、ふ～んと間延びした返事をしている理子を尻目に俺は話を続けた。

「奴等はドングリの木が好きなんだ。知ってるだろ？」

「知ってる知ってる！それなら分かる！」

「だから取り合えず、地面にドングリが落ちてないか確認して、それでドングリが沢山落ちている場所を見つけたら、その周囲にある木を調べてカブトムシがいないか探すんだ。簡単だろ？」

理子はうんと一つの頷いた後ーー

「それでカブトムシ、見つかるの？」

と疑わしげに俺に問う。

「さあな、それはお前の運次第だ。と言っても、この山なら必ず見つかるさ」

カブトムシは数を減らしたと言っても、それは大多数から少し減ったと言うだけだ。たとえ日本にいるカブトムシが十万匹減ったとしても、それは百万匹から十万匹減ったに過ぎない。決して珍しいと言った存在ではないはずなのだ。それから粗方説明を終えた俺は、スズメバチや百足（むかで）について少しだけ注意をして、カブトムシ探しを開始した。カブトムシを探すと同時に、理子に意識を向けて何か危険が伴えばすぐに駆けつけられるようにする。

しかしこうして見るとここの森にある木々は立派だ。空を突き抜けようと懸命に背伸びをしており、どれも大きく太い幹で支えられている。まるで誰が一番最初に天に頭が届くか競っているようで、俺はなぜだか申し訳ない気持ちになった。そんな考えで上を見ていたからだろうか、ふと一つの影を見つけた。

「理子、カブトムシ見つけたぞ」

「えっ!?ほんとう?」

理子は俺の声に驚いたように反応し、急いでこちらに駆け寄ってきた。

「どこどこ?」

「ほら、そこだ」

俺は顔の高さを理子と同じにして、分かりやすいように、俺の指の先と彼女の目線が重なるようにした。

「……あっ見つけた！」
どうやら理子もカブトムシを見つけたようで、届きもしないその手を懸命に伸ばして掴まえようとした。
「……理子、足を少し開いてみろ」
見かねた俺は、理子にそう言った。なんで？と言いたげに理子はしていたが、それでも黙って俺に従った。俺は理子の股の下に首をくぐらせ、そのままゆっくりと立ち上がった。
「わっ！」
俺の頭上から理子の驚いたような声が降りてくる。急降下して、勢い余った音の波が辺りの木の葉をざわざわと揺らした。
「おお～高ーい！」
興奮気味に揺らされる理子の足から伝わる振動が、俺の頭蓋に響いて脳を震わせる。
「ほら、これなら捕まえられるんじゃないか？」
「そうかも！」
俺は理子を担ぎ上げたまま、カブトムシが留まっている木に並ぶため近寄った。こうして並んでみると、改めてその木の大きさを実感する。いや、この木だけではない。辺りの木々が全てが、自然という偉大で力強い存在を実感させ、主張させている。それは

たとえ俺と理子が二人して姿を大きく見せようとしても、鼻で笑われ一蹴されているに違いないと確信できる程にはそう思えた。

「……あきら、もうちょっと近づいて」

俺は理子の指示に従い、幹に身を寄せる。

「どうだ？」

「も、もうちょっと……」

姿は見えないが、掠(かす)れたように絞り出された声から、理子が震えながらも限界まで腕を伸ばし、目的の物を掴み取ろうとしているのが伝わる。それからしばらく静かなる格闘が続き、そしてついには訪れた決着の時。

「取れた！」

理子が元気よくそう言う。そんな彼女の声が森の中でこだまする。

「よし、なら降ろしていいか？」

「うん！」

俺は担ぎ上げた時以上に、ゆっくりと理子を地面へと降ろす。

「見てあきら！」

着地した理子はカブトムシの両脇を片手で挟み、腹を俺に向けて突き出した。当のカブトムシは六本の足で空を掻(か)いて、俺に助けてくれとそう言っていた。

「おお、捕まえられたな。つっても、かなり小さいがな」
遠近感でよく分からなかったが、理子が掴まえたカブトムシは、彼女の小さな手の平に乗せてもギリギリはみ出ないほどの大きさしかなかった。もしカブトムシに小学校があったなら、こいつは間違いなく一番前に並ばされていただろう。
「ん～確かにそうかも」
俺の言葉に理子は賛同し、一人首を上下に動かす。それでもがっかりした様子は見せず、むしろ満足そうにつまみ上げたその勲章を下から覗き込んでいた。光を跳ね返し、俺と理子を照らすそれを、理子はそっと心臓の奥深くへと張り付けた。

それからも俺たちはカブトムシやらクワガタムシやら、その他多くのムシを捕まえては理子のコレクションに加えていった。たちまち虫かごはムシたちで一杯になり、それぞれが窮屈しそうに体をぶつけ合っている。その拍子に起こるぱちぱちと言う無機質な音は、俺たちに苦情を訴えかけているようで、それでも俺たちは申し訳なさげにまた一匹一匹と、かごの中に新たな同室者を押し込むのだった。

「ねぇあきら、帰ったら勝負しようよ！」
　それは俺と理子の虫かごの八割が埋まった時に、彼女が俺に向かって言った言葉だった。
「勝負って、何の勝負だ？」
　俺は直ぐ様には理子の言っている勝負の内容を察することができなかったので、素直にそう訪ねる。
「えっとね、理子の捕ったムシとあきらの捕ったムシを勝負させるの」
「ああ、なるほど。で、ムシってのはカブトムシかクワガタのことか？」
「うん、皆がやってるんだよ」
　今時そんな遊びが流行っていることに驚いたが、そこでふと俺はあることを思い付いた。
「いいけど理子。ただ単に勝負するんじゃ面白くない」
　俺はニヤリと笑って頭を傾げている理子に一つの提案をした。
「負けた方が今日の夕飯の皿洗いをしよう」
　これはただ単に、いつもは二人でやっている皿洗いを、今日負けた方がそれを一人でやろうと言っているのだ。
「ふ～ん、あきらってば私に勝つ自信があるんだ」

「ああ、あるさ。今のところ理子が捕ったカブトムシより、俺のクワガタの方が圧倒的にでかいからな。まぁこのまま行けば俺の勝ちは確定だ」
　カッカッカと俺は高笑いをして、理子に向かい勝利宣言をする。それを見た理子は頬をぷく～っと膨らませて俺を見上げる。
「むぅ～あきら大人げない！」
「カッカッカ、何とでも言え！」
「あきらの外道！」
「カッカッカ、そうかいそうかい」
「あきらのロリコン！」
「カッカッカっておい待て！そんな言葉どこで覚えた！」
「幸子おばちゃんが、あきらと口喧嘩になった時にこう言えばいいって教えて貰った」
　くそ！あのオバハン何教えてやがる！口うるさい人だとは思っていたが、まさかそんな要らなさすぎる助言を理子に吹き込むとは。
「いいか理子、その言葉の使用は今後禁止だ。世間から俺の教育方針がヤバイと噂になる前に」
　何で？とばかりに俺に疑問の視線を浴びせてくるが、今の年の理子にそれを説明するのはどうなのか？うん、駄目だ。

「とにかく禁止だ！帰りにお菓子買ってあげるから」
「ほんとに!?やった～！」
　理子はお菓子で釣れば大抵の事は言うことを聞く。まぁあんまりやり過ぎるのは良くないのだが、こう言った大惨事になりかねない事態にはよくこうしている。俺ははしゃいでいる理子によって揺られる虫かごの中の虫を気の毒に思いながら、ふと空を見上げた。木の葉から差す光は相変わらず眩しく鋭い。
「……さて、帰るか」
「うん！」
　蝉の音は相変わらず煩(うるさ)く、ただ耳をつんざくような雑音が、今は俺の胸を暖かく揺らめかせた。

　それから俺たちは理子の口封じの為のお菓子を買うために、行きに通った道とは違う山道(さんどう)を降(くだ)っていた。と言うのも、俺たちの住むアパートから目的のスーパーに行くには、先ほどまで俺たちがいた山を迂回(うかい)する必要があるのだ。俺たちは山中にいるのに、

そんな面倒なことをする必要はない。そう判断して己の勘だけを頼りに一度も通ったことのない山道を通り、山を降りた。降りたのだがーー。

「こんな所に駄菓子屋があったなんてな……。」

俺は思わずポツリと呟いた。

「理子も知らなかった」

理子は駄菓子屋に目を向けながら俺に同意した。恐らく位置的には俺たちが住んでいるアパートから山を挟んだ向こう側にあるはずだ。あまりそちら側には行かなかったので、知ることができなかったのだろう。

「かなり雰囲気のある駄菓子屋だな」

改めて見てそんな感想が浮かぶ。

ここら一帯も決してニュータウンとはほど遠い建物ばかりであるが、この駄菓子屋はその上をいく。ひびの入ったガラス扉越しに見える商品が見えなければ、ここが空き家だと言われても納得してしまうほどだ。

「……入ってみるか?」

「うん」

横引きのガラス扉に手をかける。何かに引っ掛かるようにガタガタと揺れながら、それでも強引に扉を開け放つ。外見に比べて中は小綺麗に整っていて、そこは明るく感じ

た。それは今日が快晴で、空から降り注ぐ、熱くも心地良い光がそう思わせているせいもあるだろう。

「……懐かしいな」

それは昔、ちょうど俺が理子くらいの歳の時に、幾ばくかの小銭を持って駄菓子屋の戸を叩いた事を思い出して思わず呟いた言葉だった。

俺は昔を思い出した奇妙な感覚と共に、理子と二人で駄菓子屋の中へ足を進める。ふと捻るようにして首を回す。やはりと言うべきか、その店内は外観以上に古めかしさを漂わせていた。年月によって黒く変色した木々。天井から降りてくるかのように軋む木材の音。そのどれを見ても〝ボロい〟としか言い様のない要素ばかりが目に見えて際立っていた。だがしかし、それらが店に並んでいる駄菓子と混ざり合い、俺の脳内に保管されている〝駄菓子屋〟と言う存在とぴったり重ね合わさっていた。

店の中に入ってしばらく、俺たちは遠慮がちに棚と棚の隙間を慎重に歩いて、乱雑に並べられた駄菓子やら玩具やらを見て回った。どれも俺が知る物ばかりで、駄菓子屋と言う店が昔からあまり変わっていないことに僅かながら嬉しさを感じた。

「店員さんいないね」

そんな時、ふと理子は店にあるカウンターを見てそう言う。俺はそうだなと言って理子と同じ方を向いた。しかしその瞬間、風に揺られて風鈴がチリンと鳴る。甲高く、空

気を突き抜けるような音が俺の鼓膜に潜り込む。そしてそれが合図だったと言わんばかりに、店の奥から一人の老女が姿を現した。後ろ髪を白いお団子のように纏めた、そんな年老いた女性がのっそりとした足取りでカウンターの前まで移動した。それから女性はまるでＣ４爆弾を解除するかのような慎重さで、木製の小さな椅子にゆっくりと腰を降ろした。そして俺たちはその女性と見つめ合うようにして、視線を交差させる。

「……いらっしゃいませ」

「「……は、はい」」

しばらく見つめ合った末のねっとりとした女性の挨拶に、俺たちはそう答えるしかなかった。マイペースとでも言うのか。それとも単に行動の全てが遅いのか。とにかくそんな亀のようにゆったりとした老女は、ただただ俺たちを無表情にじっと見つめるだけだった。そんな空気に耐え兼ねたのか、理子はその老女の元へと駆け寄って、カウンター越しに女性に声をかけた。

「おばあちゃん、名前はなんて言うの？」

理子の質問にしばらく間を置いて老女は言う。

「……レキ」

〝レキ〟、珍しい名前だ。だがその名を持つ人物に会った事がないと言うわけではない。たしか一年程前、ウルスと呼ばれる集団によって依頼された仕事で中国に行った

時、一緒に仕事をした幼い少女が〝レキ〟と言う名前だった。小さい、とにかく小さいその少女としばらく中国で過ごしたが、まるで感情が抜け落ちたようなその様子は人形ーーいや、ロボットのような、そんな少女だった。彼女は今、どうしているのだろうか？その当時を思い出し、ふとそんな考えが俺の中から顔を出す。

「レキ、綺麗な名前……。じゃあレキおばあちゃん、ここでおすすめのお菓子ってある？」

理子の言葉を受けたレキさんは、椅子に座ったときと同様に、慎重な様子で席を立ち、それから店内のある一角に向かって歩き出した。その足取りはやはり亀のように遅く、カウンターから棚までのその短い距離の移動すら見ていてじれったく感じてしまう。しかし彼女は着実にその距離を縮め、そしてやっとの事で棚の前までたどり着いた。それからレキさんは、目の前の棚からある一つの小さな駄菓子をつまみ上げ、そしてーー

その袋を破き口の中に放り込んだ。

「いや、食うんかい！」

俺は思わずそうツッコンだ。いや、だっておすすめのお菓子を尋ねられて、それを渡

すのなら分かるが、まさか目の前で袋を破いて食べだすとは思わないだろう。だが当のレキさんは、俺の方を向いてコクリと首を横に傾けるだけ。何を言っているのか分からないと、そう訴えているかのようだった。まさか自分が食べて「ほら、美味しいよ」とでも言う気だったのだろうか？いや、流石にそれはないかと俺は自分の馬鹿らしい思考を打ち切った。しかし俺は次の瞬間、知ることとなる。なぜ彼女がその駄菓子を口に含んだのかを。それはピーと言う独特な軽快音によって証明された。音の発信源であるレキさんの少し尖った唇はすっと元に戻り、そのままそれは謎の駄菓子の正体を見破った。

「……笛ラムネ」

笛ラムネ。名前のまんま、笛の音が鳴るラムネだ。俺も昔、それでよくそれで遊んだものだ。なるほど、それでレキさんは駄菓子を口に入れたのか。さて、恐らくーーと言うかほぼ間違いなく初めて笛ラムネと言う存在を知った理子がどんな反応を見せるのか……。俺は僅かな好奇心を乗せた目線を理子に送った。

「ス、スゴい！」

その結果は予想通り。理子は目をキラキラと輝かせて、レキさんを尊敬の眼差しで見つめていた。レキさんもレキさんで、少し誇らしげな面持ちをしているように見える。いや、それ笛のお陰だから、別にあんたが凄いわけじゃないから。俺は思わずそう言い

そうになって、慌てて自身の口をつぐむ。そんな俺を尻目に、レキさんは棚から笛ラムネを一つ取り出して理子に手渡した。

「いいの？」

レキさんはコクリと頷く。

「ホントに!?レキおばあちゃん、ありがとう！」

理子は笛ラムネの袋を破き、その残骸をポケットに突っ込んでから、中身のラムネを口に含んだ。その瞬間にピーと言う高音が店の中に広まる。そして耳にこびり着くそれと同調するかのように、風鈴の凛とした響きと、蝉のざわめき声がそれぞれ合わさって、淡い〝夏〟と言う音楽を作り出していた。

「やった！理子にも出来る！あきら、理子でも出来るよ！」

ぴょんぴょんとウサギのように跳ねながら、その理子は嬉しさを表現していた。

「ああ、よかったじゃないか」

そのままピ～ヒャラピーと言った具合に笛を鳴らしながら、尚（なお）も跳び続ける理子を俺とレキさんはただ黙って見守り続けた。

それから理子はレキさんと、けん玉やらだるま落としやらで遊んだり、俺を交えた三人で駄菓子を食べたりして過ごした。しかしその間、レキさんはほとんど喋ることなく、頷いたり首を振ったりするだけで、たとえ口を開いたとしても、ただ一言呟くことしかなかった。それでも理子は楽しそうにレキさんに話をして、俺はそんな理子とレキさんを見て軽く頬を緩ますのだった。

「ではレキさん、今日はありがとうございました」

「ました！」

日は暮れて夕方。俺たちは駄菓子屋の外でレキさんに向かい合っていた。俺たちの別れの挨拶に、レキさんはただいつものように頷いて答えた。

「また来るね、レキおばあちゃん！」

理子の言葉を最後に俺たちはレキさんに背を向けた。しかしそれは、予想外の出来事によって一事中断される。

「……明さん」

「は、はい！」

まさかここで俺の名前が呼ばれるとは思わなかったので、僅かに上ずった声で返事を

してしまった。いや、だってレキさんは今まで俺に対して声を発することさえしなかったのだ。それがまさか別れ際に俺の名前が呼ばれるなんて誰が思うというのか。しかし俺を呼び止めたのにも関わらず、レキさんはただ黙って俺を見つめるのみ。俺は堪らず彼女の名前を呼ぶ。

「レ、レキさん？」

しかしそれでも彼女からは何も話す気配がない。それからしばらく何とも言えない雰囲気が続き、蝉と風鈴の音だけが反響して響いていたのだが、そこでやっとのことで彼女の重い口がゆっくりと動いた。待ちわびたとばかりに遅刻した彼女の声がそっと俺の耳に届く。

「……気を付けてください」

しかし紡ぎ出されたのはその言葉だけ。ただそれだけだった。

「えっと、それはどう言う……」

俺はレキさんの言わんとしていることが理解できず、その意味を尋ねた。

「……勘です」

しかし、レキさんの提示した答えは俺の望んだものではなく、ひどく曖昧で不確かなものだった。

「……勘です」

レキさんは念を押すように繰り返しそう言う。よく分からないが、彼女の持つ独特な雰囲気が、その言葉をしっかりと飲み込まなければいけないと、そう警告させられているように感じた。

「……はい、忠告ありがとうございます」

俺がそう言うと、レキさんはまた無表情のまま一つ頷く。それから俺たちはいつもよりゆっくりとした歩調で家へと帰る。のろのろと急ぐことなく、ただただ歩く。

ゆっくりと、ゆっくりとーー。

泡沫夏過の二対し乙女

　近くの町で夏祭りがやっていると知ったのは二年前だ。何でも町全体で盛り上げる大規模な祭りらしく、それはローカルながら、それなりに有名だそうで、たまに県外からも訪れる人も居るほどだとか。日本に来てすぐの頃、俺は理子とその祭りに行く約束をしていた。しかし祭り当日に限って、急に外せない仕事が入り、その年には祭りへ行くことができなかった。それはそう、理子との約束を破る結果で。その次の年もそうだ。同じ理由で約束を破った。だから今年初めて、念願と言うべきか、俺は理子とその祭りへと行ける事になった時、彼女は両の手を放り投げる勢いで喜びを表現したのだった。

「あきら、早く早く！」
「分かってる分かってる」
　古風な木製住宅の並ぶ大通り、人混みが入り交じるその場所は、淡く灯る灯籠（とうろう）が吊り

下げられた屋台の倒置所と相成っていた。沈みかけた日の光とが、周囲の空気を優しく透かす。まだ始まったばかりの夏祭りは、それでも少し離れた理子の声を拾うのさえ困難なほどに大にぎわいとなっていた。それ故に、俺ははぐれないようにと理子の小さく儚い手を握っていた。待ち切れないとばかりに先へ先へと進む理子に引っ張られながら、俺はそっと人の波に埋もれ、体を埋(うず)めるようにして消えていくのだった。

その時、理子は思ってもなかっただろう。

今日この日この場所で、理子(彼女)にとっての因果とも必然とも取れる、そんな運命的な出会いがあるだなんて……。

日はすっかりと落ちきって、小太鼓と竹笛の音によって奏でられる祭囃子(まつりばやし)が、人々のざわめき声によって一つの音楽として完成された音色を生み出していた。俺たちはその中を、人間と言う障害物を避けながら進んで行く。理子が繋いでいる俺の手とは逆の手には、もう半分ほど減った真っ白な綿菓子が握られていた。パクパクと上機嫌ながらそれを啄(ついば)む姿は、ちょっとした小動物を連想させる。

「ねぇあきら！　あれ、あれ何!?」
　そんな理子がふと唐突に地面にへばり着くようにして置いてある、大きな円を指差してそう言った。半径二メートルほどで、その真ん中には大きな針が付いていた。更にその円の外方（そとべ）には、ぬいぐるみやら駄菓子やら、他にスイカなんて物もある。
「ん？あーあれね。あれはルーレットだな。たぶん、あれを回して針が止まったら、そこに置いてある商品を貰えるんだろ」
　推測でそう言ったが、どう考えてもそれしか考えられなかった。
「面白そう！　あきら、理子あれやりたい！」
　俺は理子にそう言われたので、その出し物の場所へと近づく。一回五百円。一瞬、高いなと思ったものの、当たりの景品を考えると妥当だなとは思える。まあまあするが、そもそもお金にはあまり困っていないし、折角の祭りなのだ。理子の要望には出来る限り答えてやりたい。
「おやじ、一回いいかい？」
　俺は五百円硬貨を一枚差し出して屋台のおやじにそう言う。夜なのに麦わら帽子を被り、首に白いタオルを掛けている彼の姿は、出し物を提供する人間と言うよりは農作業中の農家と言った方が適切に思える格好だった。
「はい、毎度あり！　やるのはそこの嬢ちゃんかい？」

おやじはちらりと俺の横にいる理子を見た。
「ああそうだ」
俺は理子の代わりをするようにそう返事をする。
「ほう、なら説明はいるかい？このルーレットを見たら予想は出来ると思うが……」
「大丈夫！　理子分かる！」
理子の元気全開で自信に満ち溢れた声を聞いたおやじは、それをまんま返すようなテンションで理子の声を跳ね返した。
「よし！　なら回してみな。目玉はこの浴衣だな。種類は揃えてあるから、嬢ちゃんのサイズもあるはずだ」
理子の返答を聞いたおやじはニヤリと広角を上げて、ルーレットのある一部分を指し示した。そこには〝浴衣〟と書かれた小さな木の板が、大きな顔をして寝転がっていた。その当たりとなる幅は二センチ程で、この大きな円との比率を考えると、ルーレットの針がその僅かな隙間を差す確率は限りなく小さいことは言うまでもないだろう。
「じゃあやっていい？」
理子はルーレットの針に手を伸ばしてその先端に触れた。
「おう、やってみな」
おやじの許可が出たので、理子は思いっきりルーレットの針を横へ弾くようにして回

した。俺たちの足元で回る巨大なルーレットの針が、ぐるぐると優柔不断に止まるマスを探していた。どこに止まろうか、いつ止まろうか。そんな落ち着きのない針が終ぞ選んだのは、先程おやじが〝目玉〟と指摘した大当たりのマス――浴衣が景品となる板だった。

「……マ、マジか嬢ちゃん」

おやじもまさか大当たりが出るとは思ってみなかったのか、そう言ったその声は僅かに震えていた。そして、そんな結果を生み出したラッキーガールである理子は、得意気な顔で俺にブイサインを突き付ける。

「……お前すげぇな」

俺はその結果を理子らしいと心の中で評しながら、そっと彼女の頭を一つ撫でた。そして、そんなやり取りをしている内にどうやらおやじは復活したようで、声を大にして愉快そうに笑いながら、その笑い声に負けない程の拍手を理子に送った。

「カッカッカ、参ったな嬢ちゃん！　まさか本当に当ててくるとはな」

おやじはそう言って紙袋に二着の浴衣を入れて理子に手渡した。俺はそれを見て思わず目を見開く。

「おいおやじ、一着多くないか？」

確か景品は浴衣一着だったはずだ。ぱっと見た感じ、そこまで安くはない浴衣なの

で、流石に二着はないと思ったのだが、おやじは俺の言葉を首を横に振ることで否定した。

「サービスだよサービス。今の嬢ちゃんでも着れる小さい浴衣と、大人になってから着れる大きい浴衣の二着だ。嬢ちゃんのラッキーに乾杯だ！」

そう言ってまたおやじは豪快に笑った。何とも人の良いおやじだ。俺は悪いとそう言って、理子にお礼をするように促した。

「ありがと、おじさん！」

「ああ、気にすんな」

にひひと笑いあった二人は、何ともこの祭りのように明るく陽気に見えた。それから俺たちはもう一度お礼を言って、おやじに手を振り別れを告げた。

それから俺と理子は様々な出し物や屋台を見回って祭りを楽しんでいた。それは二年間祭りに行けなかった鬱憤（うっぷん）を晴らすかのように、無邪気に、無心に無抵抗に楽しんで

いた。その間にも祭りに訪れる人数は増え続け、先ほどまで暖かかった場のかがり火が燃え上がるような業火に変わっていた。

「あきら、理子トイレに行ってくる」

祭りに来て二時間ほどたったその時、理子はトイレに並ぶ長蛇の列を指差しながらそう言った。俺は頷きながら頭を少し働かせる。それはこの人間を連結させるだけさせたような長蛇の列についてだ。恐らくだが理子がこの列に並び、帰ってくるのにはかなりの時間が掛かるだろう。だがそれは、祭りに参加する人数が多いので必然とそうなる。仕方がない事だった。

「ああ、俺はあそこにいるから終わったらそこに来い」

俺はここから少し離れた広場にある木下を指差した。

「うん、分かった」

俺の言葉に了解を示した理子はこくりと頷いて、その人溜まりの中に小さな体一つで突っ込んでいった。俺は理子の姿が見えなくなるまで見送ってから、先程自分で指定した木の下へと足を運ぶ。しかしそこである音が俺の耳に潜り込んできた。それは人々のざわめき声や、祭りの喚き声を掻い潜るようにして俺の元へとやって来た。奇怪な運命とでも言うのか、多種多様、様々な障害物全てを避けきってここまでやって来たのだ。

今一度耳を傾ける。それは恐らく子供の泣き声だった。もしかすると理子と言う存

在が身近にいるからか、その音だけが妙に強調されて聞こえたのだ。俺はその泣き声が気になり、糸を手繰(たぐ)るようにして、その声の持ち主の元まで足を進めた。道行く人々をすらりすらりと避けつつ進み、一歩一歩前へと進む。そしてようやく人混みを抜け、視界が開けた所で俺はその声の持ち主を目視することができた。声の持ち主は少女だった。背丈も、恐らく年齢も理子とさほど変わらないその少女の髪は金色で、そんな髪の間から覗く瞳はエメラルドのような碧眼(へきがん)だった。そこから一瞬彼女が外国人かと勘違いしそうになったが、顔立ちはかなり日本人寄りなので、恐らくハーフ――いや、クォーターと言う辺りが妥当かと思われる。

「……どうした、何かあったのか？」

俺は今も泣き続けるその少女に近づいてそう声をかけた。すると少女は一瞬泣くのを止めて、ビクリと怯(おび)えた表情で俺を見た。なんと言うか、そんな彼女のリアクションは俺と理子との出会いを思い出させる。

俺は少女の様子を確認する為に彼女を見た。驚きと戸惑いと警戒。それらで硬直して動かない少女。このまま後手に回っても話が進まないと思った俺は、誰が見ても、たとえ探偵科(インケスタ)に所属した事がなかったとしても予想できるであろう答えを少女に提示した。

「……迷子か？」

いや、むしろそれしかあり得ないだろう。それ以外の可能性をいくら模索しても見つけられない自信がある。だがそんな俺の心配を払拭するように少女は言った。

「……ママがいないの」

少女は警戒心と共に目元を緩めながら俺に向かいそう言った。なるほど、母親と祭りに来ていたが、この床にビー玉をぶちまけたような人混みのせいで迷子になったと言うわけか。俺は少女の親を探すために、取り合えず彼女の名前を尋ねた。

「名前は何て言うんだ?」

少女は一瞬躊躇ったものの、最終的には自身の名を口にした。

「……神崎・H・アリア　」

しかし彼女が口にしたその名は、俺の目を無理矢理に見開かせるのに十分な衝撃を与えるものだった。何故ならそう、『神崎・H・アリア』俺はその名前に聞き覚えがあったからだ。いや、そんなまさかと自分の考えを否定しながらも俺は思いきってその疑問を口にした。

「……お前、まさか神崎さんの子供か?」

「ママを知ってるの!?」

アリアが驚いたように、目と口を大きく見開く。涙で潤んだ眼球が、周囲の明かりと反発し合う。あまりの驚きによるものか、その表情には先ほどまであった怯えか完全に

消えていた。と言うよりは俺が母親を知っていた事に多少の安心感を覚えたのかもしれない。
「多分な。アリア、もしかしてだけどお前はホームズ家の人間か？」
「う、うん！」
決定だ。いや、まさかこんな所で神崎さんの子供に会うことになるなんて……。
「そうか。お前があのアリアか……」
無意識に出たその呟きが、撒き散らされた周囲の雑音に混じって溶けていく。俺だけ一人納得するのはアリアに悪いとそう思い、未だ頬に涙の跡が残る彼女に俺と神崎さんの関係を説明することにした。
「えっとな、俺と神崎さんは知り合いだ。俺は昔、イギリスに住んでた事があってな。それで仕事上ほんのたまにだがホームズ家と関わりを持ってた時期があったんだ。その時たまたま神崎さんと知り合ってな」
イギリスの武偵局に所属している以上、〝ホームズ家〟との関わりは避けられない。俺はその当時Aランク武偵だったので、カールさんの付き添いとしてホームズ家に出入りしたことがあったのだが、その時に俺は神崎さんと知り合ったのだ。
「彼女の話からお前のことも聞いてたんだが、まさか会うことになるなんて……」
俺は困ったと後ろ髪をかきながら、これからの事を考える。神崎さんと知り合いなど

と言っても、たった数回会話しただけの仲だ。当然、彼女の連絡先など知るはずもない。
「まぁ取り合えず役場に行って、お前は俺が預かってるって言っとかなきゃな」
　そう言った後に、俺はここからでも見える長蛇の列に視線を向けた。それから今一度、アリアに向き直る。
「本当は今すぐにでも動きたいんだが、実は連れがまだ戻ってなくてな。それまで少し暇を潰してようか」
「連れ？」
「ああ、お前と同じくらいの女の子だ？」
「おじさんの子供なの？」
「まぁそんな感じだ。とまぁそれは置いておいて、おじさんは止めろ。俺はまだ若い……はずだ」
　もう三十を過ぎて数年になるが、〝おじさん〟と呼ばれるにはまだ早い。早いと思いたい。そんな必死で自分に弁護を立てる俺を無視してアリアはこちらを見上げながら当然の質問を口にした。
「じゃあ名前教えて」
　そのアリアの言葉で俺はまだ自分の名前を名乗ってなかった事に気がついた。
「……明（あきら）だ」

「あきら……普通の名前」
「喧しい」
個人的にこの名前は気に入っている。と言うか〝神崎・H・アリア〟と言う名前が珍し過ぎるだけで、別に俺の名前が凡庸と言うわけではないはずだ。
「取り敢えず、あの木の下に行こう。あそこで待ち合わせしてるんだ」
でないと他の誰かにあの場所を取られかねない。俺はそっと立ち上がり、先ほど自分で指差した場所へ向かおうと、一歩を踏み出した。しかしその瞬間に、ふと弱々しいブレーキがかけられた。後ろを見ると。アリアが俺の服の端を引っ張っていた。どうした？　と俺は小さく首をかしげる？
「……手」
「ん？」
「手、繋いで」
神崎さんとはぐれて不安なのだろうか。それともただ単にこの人混みを前にして再び迷子になるまいとしているのか。どちらにしても俺がアリアと手を繋ぐのには十分過ぎる理由だ。俺はそっとアリアに手を差し出す。
「……ん」
それに対してアリアは小さく頷いて俺の手を握り返した。その手は夏の暑さに反し

て、ひんやりと冷たく、そしてとても心地が良かった。

「……あきら、その女は誰？」

理子がトイレから戻ってきてすぐ、口にした言葉がそれだった。口元がひくひくと痙攣（けいれん）し、その目線の先は俺とアリアが手を繋いでいるその接合部に向けられている。

「知り合いの子供だ。迷子になってるところを見つけたんだ」

俺は正直に言った。

「へ、へぇ～そうなんだ……」

理子は理解はした、しかし納得はしていないと言う様子で半ば適当とも言える相づちを打った。それからこの夏の暑さでやられてしまった草花のように、しゅんとその頭（こうべ）とツインテールを萎れさせた。

「折角あきらと二人きりだったのに……」

「ん、どうした？」
「何でもない！あきらのアホゥ！」
理子が細々とした声量で放った台詞が聞き取れず、疑問の言葉を口にしたのだが、帰ってきたのは理不尽とも思える怒鳴り声だった。するとその理子の声に驚いたのか、アリアは俺の手を両手ですがり付くように抱え込んでこちらに体を寄せてきた。
「あーそこは、理子の場所！」
アリアのとった一連の行動を目にして理子はそう言うが、しかしその言葉に反抗するようにアリアはより一層、俺の腕をぎゅっと抱き抱(かか)えた。
「むぅーー！」
理子は不満を体全体で表現しながら、今までに聞いたこともない、そんなむくれた声を鳴らす。祭囃子(まつりばやし)に理子のうなり声が合わさって、やがてそれらは打ち消し合うようにして消え去った。

　この時代、この日本では戦争を身近に感じることはまずない。武偵である俺はよく、戦争の縮図のような場所に赴くことはあるものの、戦争そのものには行ったことは一度たりともない。しかしそれはあくまで今日までの話。と言うのも今、俺の目の前で実際に小さな小さな小人たちによる戦争が勃発しているからだ。

「むぅ！」

「ふん！」

　俺の右の腕には理子が左の腕にはアリアが、それぞれ引っ付いてお互いに睨みを効かせていた。始めはおどおどしていたアリアも今では対抗心剥き出しで理子と喧嘩腰になるほど自然体でいれるようになっていた。それは良いことなのではと思うと同時に、俺の心労を加速させる要因でもあった。そんな二人は現在もいがみ合うようにして口喧嘩を加速させていた。

「ちょっと、いつまでにあきらにくっついてるの？　あきらは理子のあきらなの！」

「あきらはあきらのもんでしょ！　誰のものでもない。それにあきらもあんたなんかより私といた方が楽しいに決まってるわ！」

　そんな左右から抱きつかれながら飛んでくる怒号を、俺は苦笑と言う一手で受け流

す。先程からずっとこの調子で、まさかこの祭りに来た時には思いもしなかった展開に、俺も正直かなり動揺している。しかしいつまでもこうしてはいられないだろうと、俺は二人の気をそらすために目の前にあった屋台を利用することにした。

「ほら、二人ともあれ見てみろよ。楽しそうだろ、やってみないか？」

俺が首で指した場所には大きな棚に様々な景品が陳列されている屋台。その上には〝射的〟と書かれた看板が静かに備え付けられていた。それを見た二人は先程いがみ合っていたのが嘘だったかのように、その身に纏っていた雰囲気を一変させ、収まり切れない好奇心が瞳から溢れ出していた。俺はそのあまりの変わりように思わず微笑みながら、二人をその屋台まで連れていくことにした。幸いなことに屋台に行列はなく、わずか数分並んだだけで自分たちの出番が来た。俺は金銭と交換に渡されたコルク玉を理子とアリアに分けて与え、彼女たちの後ろでそっと見守ることにした。そこでふと俺は何気なく陳列されている景品たちを見た。景品は小物の玩具や駄菓子、大きいものになるとぬいぐるみ等があった。一見、何の関連もないはずのそれらが、同じ射的の台に置かれていると言うだけ、ただそれだけで並び合う全てがまるで親族のような結び付きがあるように錯覚させる。俺のそんな思考を横から割り込むようにして押し出したのは、アリアの鋭い一言だった。

「ふん、私は絶対あんたより一杯景品を打ち落とせるんだから。なんたって私のひいお

じい様は銃技の超達人だった凄い人なのよ。私はその血を継いでるんだから、こんなお遊びなんて朝飯前よ」

銃にコルク玉を入れながら理子に向かってそう言うアリア。喧嘩腰のその言葉に対し、理子は怒り心頭と行った具合に表情を歪ませ言い返す。

「凄いのは貴方のひいおじい様の話でしょ！　そんなので私に勝てる理由にはならないもん。それに理子は将来、あきらのパートナーになるんだから、これくらいは楽勝なの」

それを聞いたアリアは余裕の笑みを浮かべながら、鼻で笑うようにして理子の言葉に返答する。

「あんたみたいなへっぽこがパートナーになるなんて、あきらも可哀想だわ。きっと私の方があきらの良いパートナーになれるはずよ。そうね、じゃあこの射的で一杯景品を取った方があきらのパートナーになるのはどう？」

アリアの提案に理子は一瞬目を見開いたが、次の瞬間には対抗心をそのまま具現化させたような目線でアリアを睨んだ。

「絶対にあきらは渡さない！」

それから二人は同時に射的の的に向かって構えた。祭りのにこやかで賑やかしい雰囲気とは無縁の、静かで殺伐とした空間を作り出す二人。まるで戦場から空間を切り取って、そこだけこの和やかな祭り風景に張り付けたような雰囲気だ。

そして二人は同時に棚に向かって銃口を向けた。ただの子供同士の張り合いだと言うのに、そこには妙な緊張感があった。すると、そんな中でふと理子が俺の方を振り向いた。

「……あきら、ちゃんと見ててね」

理子のそんな台詞に俺はふふっと微笑んで、ああと返した。

そしてついに二人の対決は始まった。一人辺り五発。この僅かな弾数でどれだけ多く、どれだけ大きなものが取れるのか。それで勝負が決まる。

始まりは静かだった。本物の銃でない、コルク弾が発射されたかすら疑問に思ってしまうような落ち着いた開始の合図。勝負事であるはずなのに、その平和な発砲音は俺にちょっとした安らぎを与えた気がした。

「やあ！」

そんな安らぎを引き戻す理子の電灯のように弾(はじ)けた声。二人はほぼ同時に弾を発砲していた。並び合うかのように飛び出されたコルク弾はそれぞれ小さなお菓子の箱にぶつかり、棚の下へと叩き落とされた。当たり所が悪かったのだろう、二つの箱はぐらぐらと揺れ動いたものの、それらが棚から落ちるには十分ではなかったようだ。

そして二発目。これも同時に二人で放つ。理子のコルク弾は再び同じお菓子の箱へ、そしてアリアのコルク弾は以外にもその横にあった人形へと向かって行く。結果とし

て二つとも棚の下へと落下した。しかし獲得した獲物の差から、この二発目による勝負はアリアに軍配が上がった。悔しそうに唸る理子。アリアはそんな理子を見て挑発的に笑うのだった。

アリアと理子による射的勝負はなんと引き分けに終わった。アリアが人形二つとお菓子を二つ。理子も同じ人形とお菓子を二つずつ。始めはアリアが押していたものの、理子もその射的センスによりぐんぐんと追い上げ始めたのだ。いや、射的センスは二人とも同じように差はなかった。あるとしたら〝遊び〟の勝負強さかもしれない。それが最後に理子を同点へと押し上げた要因だろう。

ともかくとして結果は同点。俺としてはこれが一番良い終わり方だと思ったのだが、そう思っていたのは俺だけのようで、理子とアリアの二人は全く納得をしていなかっ

た。と言うのもそれからか二人の勝負だったからだ。先の勝負の後、次は金魚すくいで勝負だと言い出し、それが引き分けに終わると輪投げ、ヨーヨーすくい、挙げ句の果てにかき氷の早食いにまで発展した。しかし結果はいつまでも同点。二人がかき氷の冷たさによって沸き上がる激痛を頭を押さえ込むことによって沈めようとする今になって、ようやく勝負が一段落着いたのだ。

「ほら、温かいお茶だぞ」

俺は神社の敷地内にある大岩に理子とアリアを座らせ、先程自販機で買ってきたお茶の入った缶を差し出した。二人は飛び付くようにそれを受け取ると、プルタブを何度か引っ掻き、開けられた缶の中身を一気に口へと流し込んだ。

俺はそんな二人の様子を苦笑いしながら眺める。ここだけこうして見れば仲良しな、もしかすると双子の姉妹と言っても通るかもしれない。

しばらく二人はたた黙って缶を傾けていたのだが、頭痛が収まり始めたのか、飲み口から唇を離すとホッとしたように息を吐いた。

「ねぇあきら」

そうした後、アリアがふと俺に呼び掛けた。

「ん、何だ？」

「さっきの勝負、私の勝ちでしょ？」

いや、勝ちも何も二人ともほぼ同じ結果だったただろ。そう思い、俺がアリアの言葉をどう受け流そうしたところで理子から異論の声が飛ぶ。

「んな!?　違う！　私の勝ち！」

「はあ!?　どっからどう見ても私の勝ちよ！」

またもや始まる二人の口喧嘩。最早この光景は世界が終わる日まで続くのかもしれない。そう思っていた時だった。

「アリア！」

その呼び声が俺たちの間に舞い込んできた。ふと声の聞こえた方向に目を向けると、そこにはなんと、俺が探していた人物――神崎かなえさんが表情を歪ませて立っていた。

「ママ！」

アリアはバッと勢いよく立ち上がり、彼女の元へと駆け寄っていく。そしてその勢いのままかなえさんに抱きつく。それは微笑ましい親子の再会であり、本来ならば誰が見てもそっと頬を緩めるであろう優しい光景だった。実際、俺もそうだった。しかしそれは直ぐに否定されることとなる。

ふと俺の袖をぎゅっと理子が握りしわを作る。俺ははっとして理子を見下ろした。彼女の顔は胸をぎゅっと握り潰されそうになるほどの悲しみで染まっていた。心臓に

針を突き立てられるような痛みが、俺を襲う。何がそう彼女をそこまでの表情にさせるのか。理子の過去を知らない俺には正確な答えが出せるわけではない。だがそれでも察することはできる。それができない程、俺は自分を鈍い男と思ってはいない。

俺は着物の袖を握ってくる理子の小さな手を上から優しく包むように握り返す。それから理子の肩に言葉を添えるよう言葉をかける。

「お前には俺がいる」

理子は僅かに目を見開かせる。その目には薄っすらと湿り気が帯びられており、祭の賑やかさを象徴する灯りたちがその目に反射し写し出されている。そんな純真で純粋なその目にそっと俺の顔が割り込む。ほっそりとした焦点がしっかりと俺を捕らえて離さなかった。

「……うん」

理子はふわりと、羽が浮くように微笑んた。今一度、俺の着物をぎゅっと力強く握り直す。いつの間にか俺の胸にあった鋭い痛みは鳴りを潜め、それに比例した暖かみが水面に広がる波紋のように身体中へと広がる。夏の蒸し暑さを押し退けるような温もりが理子の指先から心臓まで染み渡った。

「ありがとうございます、明さん」
アリアとのやり取りを一頻(ひとしき)り終えたかなえさんは二人して俺の元へと駆け寄り、そして感謝の言葉と共に頭を下げた。
「いえいえ、たまたま自分がここにいただけですから」
実際、そこまで迷惑をかけられたと言う自覚はない。いや、理子とアリアの起こした戦争を考えると少し苦労した気がしなくもないが……。
「それでもです。アリアが明さんと出会ってなかったらと思うと……」
かなえさんは悲痛な表情を浮かべながらそう言う。確かにもしこの祭りで理子が迷子にでもなったらと思うと俺も気が気ではなかっただろう。そう考えるとアリアとここで出会えて良かったと思えてくる。

「ほら、アリアもお礼を言って」
かなえさんはアリアの背中にそっと手を添えてそう言った。
「ありがとう、あきら」
アリアも先程までの態度はどうしたと言うのか、素直に頭を下げて感謝の言葉を述べる。こうして端から見ると親と子の関係と言うのは言葉にし難い特別なものだと感じさせられる。俺も理子とこんな関係がいつか結べるだろうかとそんなことを思ってしまう。
「もう迷子になるなよ」
俺はアリアの頭に手を乗せ、グリグリと撫で回す。少し込める力が強すぎたのか、アリアの頭が俺の手に合わせて規則的に振られる。
「うん!」
俺が手を離すと、アリアは顔を上げ、祭の夜に不相応な明るい笑みを浮かべそう答えた。俺もそれに同じような笑顔で返し、そこから一歩下がり、今一度かなえさんへと向き直る。
「それにしてもかなえさんが日本に来ているなんて驚きました。てっきりもう会うことはないと思っていましたから」
かなえさんは普段イギリスにいるので、俺がイギリスに返って来なければ会えないと

思っていた。だからしっかりと別れの挨拶も済ましたと言うのに、こんなばったりと出会うとは運命と言うものはつくづく数奇なものだと思わされる。
「私もですよ。突然、日本に転勤と聞いた時は驚きましたけど、まさかこうして出会えるとは思いもしませんでした」
かなえさんは微笑みを浮かべながらそう言う。数年たっても変わらないその日溜まりのような笑みに、懐かしさと和らぎを感じさせられる。
「日本へはちょっとした用事で来てるんです。それで折角なのでアリアも連れて観光しようと。この子にも少なからず日本の血が流れてますので、一度は日本と言う国を肌で感じ取って欲しくて」
なるほど。そんなかなえさんの親心によりアリアはここにいると言うわけか。アリアに日本の血が流れていることは母親のかなえさんを見れば一目瞭然。かなえさんも母親としてそんな気持ちが沸き上がるのも理解できると言うものだ。
「それで、明さん。そのお子さんは……」
俺がかなえさんの考えに同意を示していると、ふと俺の裾を引っ張ったまま隣に立つ理子に視線を向け、かなえさんは口を開いた。
「ああ、ちょっとした事情で預かることになりまして、今は自分が育ててるんです。理子と言います」

俺がそう紹介すると、それに合わせて理子はペコリと頭を下げて行動による自己紹介を刊行する。しかしかなえさんにしては珍しく、それに返事を返さないでじっと理子の顔を覗き込む。

「かなえさん?」

俺はそんなかなえさんの様子に訝しみ、彼女の名を呼ぶ。

「ご、ごめんなさい。少し考え事をしていて……」

俺の声に反応し、かなえさんはハッとして顔を上げ、取り繕うように笑顔を浮かべた。それから彼女は膝をそっと曲げ、理子に自分の目線を近づけた。

「よろしく、理子ちゃん。アリアと仲良くしてあげて」

理子は先程までじっと凝視されたせいか、かなえさんに僅かな警戒心を見せながらも、こくりと小さく頷いた。かなえさんがなぜあのような行動を取ったのかは俺も分からないが、改めて掘り下げることでもないかと特に気にしないでおいた。

とにかくアリアとかなえさんを再会させることができ、肩の荷が降りたと安堵の息を吐いたそんな時だった。ふと側に立っているスピーカーから砂同士を擦り合わせたようなノイズが走った。それを合図におっとりとした女性の声が周囲に響き渡る。その放送の内容は予告だった。『あと十分後に花火が打ち上げる』。そんな当たり障りのない、大きな祭りならば当然流れるであろう予告。祭りの醍醐味の一つとも言えるそれを

見逃すわけにはいかないと、俺はかなえさんに別れの挨拶をしようとしたそんな時だ、それはかなえさんの言葉により邪魔立てされた。

「あきらさん、折角なので一緒に花火を見ませんか？」

思いもしなかったそんな提案に、俺は一瞬呆気に取られるが、しかしそれは悪くないなと言う考えに思い至る。俺は視線を下へとやり、唯一の同伴者に意見を求めた。

「理子、いいかな？」

「うん、いいよ」

もしかしたら渋るかもしれないなと考えていたが、理子はあっさりとかなえさんの提案に了承を示した。どうしたことかと疑問が沸くが、この年頃の女の子は気まぐれが激しいことを知っているので深い理由はないのかもしれないと、特にその先を考えるのことはしなかった。

こうして、かなえさんたちと花火を見ることに決め、ゆっくり花火を見れるような場所を探すため動き始めた。しかしこの人混みの中で、更には十分と言う制限時間がある中で落ち着いて花火を見られるような場所などなく、結局適当な道端で空を見上げることとなった。

そしてそれから間もなく、花火は始まった。人々が期待に胸を膨らませ、花火についての会話を交わす中、こちらの気も知らないで、それは唐突に打ち上がった。ただドン

と一発。大きくもなく、小さくもなく、全く面白みのない白色の花火だった。しかしそれが始まりの合図だった。

「おおっ！」

思わず唸り声を上げてしまう。しかしその唸りも、激しい爆発音に飲み込まれ消えていく。

野暮ったかった夜空は色鮮やかな装飾品に溢れかえり、まるで花魁のように人々の目を集める。それは俺も例外ではない。夜空がそっと俺の瞳に花火と言うアクセサリーを共有しようと手を伸ばす。

――綺麗だ。

その言葉、感想だけがただひたすら俺の頭を回り巡った。そんな時だ、ふと服の袖をちょんちょんと引っ張る感触によって現実へと意識が戻されたのは。

ふとその方向へ顔を向けると、そこにはアリアがいた。何やら不機嫌そうにこちらを見上げる様は、失礼ながら彼女にどこか似合っていた。

「あきら、あんまり見えない」

どうやらアリアの身長ではあまり花火が見えないようだ。だから俺に言ったのだろう。頼り、と言うよりは遠回りな甘えを。

「仕方ないな」

俺はそう言ってしゃがみ、下からすくうようにしてアリアを肩に乗せる。

「わぁ！」

驚きの声がアリアから上がる。恐らく男の目線の高さなど久しぶりなのだろう。僅かな体の震えが、肌から着物を通し、俺に伝染していた。

しかしそれは一瞬のこと。次の瞬間にアリアは空を見上げてただ花火の美しさに魅入られていた。

俺もそれにつられて再び夜空に目を向ける。

色とりどりの炎が黒を燃やし、そして燃え尽きて墨になったかのようにまた黒へと色を戻す。一つ一つが一瞬の出来事だが、それを繋ぎ繋いで一つの空を構成していた。

しかしそれも永遠にとはいかない。いつかは終わりが来る。花火による夜空のファッションショーは閉幕となる。

そしてその時は呆気なく訪れた。全ての騒音が消え、無音がその場を支配する。ただただ空は花火の撒き散らした煙でどこか白ずんでいた。そしてそれを切り開く一つの小さな火の玉が空へと打ち上がった。ぐんぐんと上へ上へ登っていく。勢いよくただ真っ直ぐに空へと打ち上がる様は、もう夜空を突っ切って宇宙まで行ってしまうのではないかと錯覚させられた程だ。

しかし勿論そんな訳はなく、その小さな火の玉はある程度の高さまで上ったところ

で、大きくその身を弾けさせた。ぶわっと広がる炎の花に遅れて、大きな爆発音が耳に届く。

これが最後の花火なのだろう。予告も何もされてないのに、この花火が最後であると、何故か察することができた。名残惜しさと、虚しさを同時に運んだ祭りの終わりに相応しい大きな花火。

様々な感情が詰められたそんな花火の色は赤紫（カメリア）だった。

花火が終わり、周囲の人々が散り散りに去っていく。先程まで黙って空を見上げていたのが嘘だったように、皆が足元を気にしながらそれぞれの場所へと戻っていく。

「花火……綺麗だった」

そんな中、俺の肩に乗ったアリアは未だに花火の余韻に浸っているようで、星一つない真っ黒な空を見上げてそうつぶやいた。

「あきら、重いでしょ。下ろしていいよ」

それから少しして、アリアはそう言った。俺はその言葉に従うよう、腰を落とし、アリアの宙ぶらりんだった足を地面へと着地させる。
「ありがとう、あきら」
「ああ、花火見れて良かったな」
そう言った後、お互い微笑みを浮かべる。しかしそこでふと思い出した。アリアにばかりかまっていたと言うのに、珍しく理子が彼女に突っかかってこないと。
そうして周囲を見渡す。そしてある光景を見つけ、思わずぎょっと瞼(まぶた)を引き上げる。
何と、かなえさんが理子を腕に抱えて、その理子と仲良く話しをしていたのだ。恐らく理子の身長だと花火が見れないと察したかなえさんが気を効かせてくれたのだろう。アリアに気を回し過ぎて理子を放ってしまい、その尻拭いをかなえさんがしてくれた。その事に申し訳なさを混じらせた羞恥心が混み上がってくる。
「申し訳ありません、かなえさん！」
俺は急いでかなえさんに近づいて頭を下げる。
「いえいえ、理子ちゃんも軽いですから」
そう言ってかなえさんは理子をゆっくり地面へと下ろす。その瞬間だった。怒り心頭と言った具合のアリアが理子にずんずんと詰め寄ってきた。
「あんたお母さん取ったわね！」

どうやら理子がかなえさんに抱えられたことに対して嫉妬しているらしい。

「そっちこそあきらを取ったじゃん！」

そうして理子の反論からいつもの喧嘩が始まった。俺は相変わら喧嘩っ早い二人に呆れ、苦笑いを浮かべる。

もうこのまま放っておいてもいいが、そうなった場合、後が怖いのでどうにか二人をなだめようとしたそんな時だった。

「明さん」

ふと背後からかなえさんが俺の名前を呼んだ。どうしたのだろうかと後ろを振り返れば彼女は優しい笑みでこちらを見つめていた。柔らかく、温かく――彼女はそんな表情をしていた。

「……アリアがあんなに楽しそうにしてるのは久しぶりで。今日、ここに来て本当に良かったです」

彼女は流れるような口調でそう言った。かなえさんの目線は未だに言い合いをしている理子とアリアに向けられている。子供同士の喧嘩を微笑ましく見守るその様子はどこか聖母――と言えば言い過ぎかもしれないが、しかしそう思ってしまう程に彼女の瞳は慈愛で満たされていた。

「奇妙な運命だわ。これもこの子がホームズ家の娘だからかしら」

ふと溢したかなえさんの呟きに俺はふと首を傾げる。俺には彼女の言っていることが何一つ分からなかった。

俺のそんな様子に気がついたのだろう、かなえさんはこちらに笑いかけて自身の言葉の補足をした。

「最近没落したリュパン家のご息女も〝理子〟って名前でしたから」

ドクリと心臓が跳ねた。夏の蒸し暑さが肌を撫でていると言うのに、冷や汗が全身から吹き出す。喉が渇き、唇が震える。扁桃腺（へんとうせん）が肥大したかのように言葉が詰まり、話すことができない。

しかし俺はここで言葉を止めるわけにはいかなかった。どうしても言葉にして彼女に聞かなければならないことができたのだから。

「ぼ、没落……ですか。えっと、じゃあリュパン家の方たちは？」

震える声を何とかなだめ、声を絞り出し、やっと言葉を形にして体外へと吐き出した。後は帰ってくる言葉を待つだけ。それだけだと言うのに何故か俺の心は平常から大きく乱れ、それに伴い呼吸もどこか浅くなる。

そんな中、返ってきた。一つの運命を握ることになるかもしれない言葉が。

「確か当主のご息女だけが生きておられて、今はルーマニアに引き取られたと聞いています」

何かがカチリとはまったような音が脳の奥で静かに鳴り響いた。

理子とアリアの喧嘩が一段落したところで、俺たちは自宅に帰ることにした。もう夜も遅く、この人だかりでは帰り道が混むと予想できるので、早めに行動するのが吉だ。

「明さん、今日はありがとうございました。貴方がいなかったらと思うと……」

これから別れようと言うところでかなえさんは俺に向かって丁寧に腰を折った。
「いえいえ、こちらこそ楽しい時間を過ごさせていただきました」
事実そうだった。かなえさんと久々に会えて楽しかったし、アリアとも出会えて良かったと思っている。そういう意味では迷子になったアリアに感謝だ。
「ほら、アリア。お別れの挨拶よ」
「……」
かなえさんの手を握っているアリアは彼女にそう言われているものの、何やらうつ向いて、一向にこちらへ顔を向けない。かなえさんと繋いでいる逆の方の手はぎゅっと握られており、何かを耐えているように見えた。
アリアがこうなっている理由は言われずとも察することができた。
「ふん、ここで別れられて清々する！」
そんな様子のアリアだったが、理子の喧嘩を売るようなその一言で態度が一変する。
「んにゃ！　なによ！　こっちこそ清々するわ！」
先程までうつ向いていたのが嘘だったかのように、アリアはがばりと顔を上げ、理子に対して鋭い目線を送る。しかしそこにいつもの迫力はなく、彼女の瞳はしっとりと夏の湿気に同調するよう濡れていた。
理子はそんな喧嘩言葉に喧嘩言葉で返したアリアに対してふん、と顔を背け、そして

尖ったままの口をそっと開く。
「あきらのパートナーには私がなる！　だけど貴方があんなこと言ったから気持ちよくあきらのパートナーになれない。だから――」

「だからまた今度会った時に勝負ね！」
アリアは大きく目を見開かせる。それと比例するように、彼女の瞳に輝きが増す。まだ灯っている祭りの残り火が彼女の瞳に反射して夜空の星のようにきらめいていた。
「し、仕方ないわね！　また勝負してあげる。でも絶対私が勝つわ！」
アリアはそう言ってニヒルな笑みを浮かべる。先程まで彼女を覆っていた重く暗い気配はもう既にどこかへと消え去っていた。

――もう大丈夫だ。
そう判断した俺はアリアの頭に手を起き、グリグリと頭を軽く押さえつけながら撫で回す。鬱陶しそうに俺の手を払いのけるくらいするのではないかとと思っていたが、アリアはむしろ気持ち良さそうに俺の手のひらを受け入れていた。
「じゃあな、アリア。いつまでもちっこいままじゃ駄目だぞ」
「ふん、大丈夫よ。将来はあきらを見下ろすぐらい大きくなるんだから」
俺たちの交わした別れ際の言葉はこれだった。感動的でもなく、重苦しいものでもなく、適当と生意気をそのまま形にしたような軽々しい言葉。しかし俺たちとアリアの間にある別れの子などそのくらいできっと丁度いいのだ。
今一度頭を下げ、人混みの中へと去っていくアリアとかなえさん。二人はすぐ万華鏡のような浴衣の群れに飲み込まれ姿を消した。
「寂しくなるな」
二人の消えて行った方向を眺めながら俺はそう呟いた。
「……うん」
理子はただそう言ってこくりと首肯する。アリアがいなくなったら素直になるんだなと、思いながら俺はふと少し前にかなえさんから得た情報を思い返していた。
――理子はリュパン家の娘かもしれない。

まだ確信はない。しかし引き取られた先がルーマニアなら、船に乗ってイギリスにたどり着くことはできる。まだ判断できる要素は多くないが、可能性としては十分にあり得る話だ。

しかし、もし理子がリュパン家の娘だとすれば、彼女の両親はもう既に――。

「……なあ、理子」

「何？」

「だっこしていいか？」

俺の言葉に驚いたのか、理子はポカンと小さな口を真ん丸に開ける。無理もないだろう。俺が「だっこしていいか？」などと理子に言ったことなど今まで一度もなかったのだから。

「どうしたの？　寂しくなっちゃった？」

しばらく固まったままだったが、少しして心配そうな表情を張り付けて理子は俺の顔を見上げる。

「……そうかもな」

「にひっ！　ならいいよ！」

俺がそう言うと理子は大きな笑みを浮かべ、こちらに向かって両手を差し出した。

俺は無防備を晒した理子を抱き上げて、彼女の体を腕へと納める。そうするとすぐ

に、理子は俺の顔を両の腕で包み込んだ。そして同時にこう言った。
「寂しくない、寂しくないよ」
まるで子供を寝かしつけるような優しい口調。背格好や性格は全く違うと言うのに、俺はそんな理子の姿に先程別れたかなえさんの姿が重なって見えた。
きっと母性――と言うよりは〝温かさ〟と言う言葉がぴったりなモノがそうさせたのだろう。
俺はそんな小さな小さな娘に心の中でこうささやいた。
――寂しくない、寂しくないよ。

九夏一伏

町の端にある小さな駄菓子屋さん。田舎も田舎の小さなその店外で、俺は目の前の老婦人に一つ頭を下げていた。地面を燃やすかのような激しい日差しのせいか、自分の作った影が色濃く地面のアスファルトにへばり着いていた。

「すみません、レキさん。理子を頼みます」

「はい、責任を持って預からせていただきます」

歳を全く感じさせないピンと伸びた背筋を立てながら、目の前の女性――レキさんがそう言う。白髪に少しグラデーションされた水色が、この夏日に反抗するような涼しさを演出していた。

はて、なぜ俺がレキさんに対し、頭を下げているのか。それには理由があった。それはアリアと出会ったあの夏祭りが始まりだ。俺はあの日、かなえさんから理子がリュパン家の娘かもしれないと言う手掛かりを掴んだ。今まで探し続けたが、見つからなかった真実があるかもしれない。俺はそう判断し、長期休暇の申請を職場に申請した。そしてその期間に何とか理子の過去に何があったのかを知ろうと思ったのだ。

だから俺は理子に出張だと嘘を言い、しばらく家を空けることにした。しかしその

間、理子を放っておくわけにはいかず、何とか彼女を預かってくれる人を探していた所、何故かタイミング良くレキさんが現れ、事情を話すと快く了承してくれたのだ。
「……明さん、気をつけてください」
レキさんは相変わらずの無表情でそう言うが、どうやら本当に心配してくれているようで、彼女の持つ瞳は真っ直ぐとこちらを見て離さなかった。
「はい、ありがとうございます」
俺はレキさんにそう言って、彼の隣で顔をうつ向けている理子に目線を移した。理子は直前まで俺が離れる事を嫌がり、くずったのだが、しかし最後には何とか納得させて、やっとの事でここまで連れてきたのだ。
「理子、レキさんに迷惑を掛けないようにな」
俺はそっと理子を包むように、優しくそう言う。しかしそれを聞いた理子は目に一杯の涙を溢れさせ、俺の元へと駆け寄り、腰に抱きついてきた。
「駄目！あきら行っちゃ嫌だ！」
鼻を啜(すす)る音に混じって、懇願と言う願いが俺の体を伝わって響く。俺は未だに駄々を捏(こ)ねる理子に思わず微笑んでしまい、その感情のまま彼女の頭を撫でた。
「仕方ないだろ。それに前にも一度だけこんな事があったじゃないか。今回はそれが少し長くなっただけだ」

「で、でも！だ、だっで！あきらがそのまま帰って来ないような気がして！」
理子は俺の腰に押し当てていた顔を僅かに上へと向けた。俺を下から見上げる理子の表情は、〝不安〟と〝恐怖〟。その二つによって厚い化粧が施されていた。
「心配し過ぎだ、理子。大丈夫、安心しろ。俺がお前との約束を破ったら事なんて一度も無かっただろ？さっきも約束したじゃないか。必ず理子の元に帰ってくるって」
そう。俺たちの住むアパートから出る前に俺と理子は指切りをしていたのだ。〝必ず理子の元へと帰ってくる〟。そう約束したからこそ、理子はぐずりながらもここまで来たのだ。
「……じゃあもう一回約束」
だからだろう。理子がそう提案したのは。今思えば、この二年で俺と理子の間にある〝約束〟と言う言葉は、ある種特別な意味を持っていたのかもしれない。俺は理子の肩に手を置きながら、ゆっくりと膝を曲げてしゃがむ。それからそっと差し出された、小さな小さな小指に俺の不格好な指を絡ませた。
「指切りげんまん嘘ついたら針千本飲〜ます、指切った」
硬い約束。複雑に絡み合って混ぜ合わさったその凝固な誓いは、再び二人が出会うまでほどけはしない。二本の手があって、初めてその結びをほどく事ができるのだ。
「じゃあな理子、行ってくる」

「うん！行ってらっしゃい！」

最後には笑顔で見送ってくれた理子に俺は手を振り、そして振り返らなかった。それはそう。俺も理子と離れるのが寂しいと、そう思っているのだから。だから次に理子を見る時は、全身を彼女に向けてと俺は自身にそう誓いをたてた。

そこは今の季節にふさわしくない場所に思えた。肌で感じる温度が、髪を撫でる風が、肺に取り込む空気が、その全てが〝夏〟とは縁遠い所にあるように思えた。しかし

たまに差し込む日差しが体に突き刺さると、それは勘違いで間違いなく今が夏なんだと改めて認識させられる。

「……寒む」

思わずそう呟く。その呟きはどこからか聞こえる水の流れる音や、風が木葉を揺らす音にかき消される。そしてそれに対抗するように、俺の足元からザクッザクッと砂利を踏みしめる音が周囲に響いた。

「夏の山がこんなに寒いとは思わなかったな」

そう。俺は今、山道を歩いていた。ただ山道と言っても、その道は幅広く、道も整理されており、車一台程度なら普通に走れるような山道だった。

そんな山道を登り、俺はある場所を目指していた。それは一つの建物だった。詳細に言うならば『リュパン家の所有していた館』と言った方がいいだろう。何故、リュパン家の所有していた建物が日本にあるのかと言うと、それは正確には分からない。しかし、いくらでも予測は立つ。恐らくではあるが、理子の母親と思われる人物の故郷が日本だからだろう。元々、大きな家名と言うこともあり、その程度なら少し調べただけですぐに判明した。

今はリュパン家の物でなく、ある人物の所有の建物となっているが、何故かその人物の情報は調べても出てこなかった。しかし何か少しでも手掛かりがあるかもしれない

と、あまり考えなしにその場所へと向かっていた。

館が見えたのは、山道を進んで二十分ほどたった時だった。緑の屋根に白い壁。木製のシンプルなその館には何一つ余分なものなど無く、装飾などもあまり見られなかった。しかし館の色合いと、その周囲を取り囲んでいる木々たちとが一つに混ざり合い、美しい光景を演出していた。むしろ何か一つでも派手な装飾などもあれば、その光景が台無しになっていただろう。

俺は一歩一歩、確実に歩みを進め、館の目の前に到着した。

外からは人の気配は感じられないが、館の外壁や、周囲の地面を見るに、定期的に整備され、人の手が加えられていることが分かる。俺はきっと誰か住んでいるのろうと思い、館の入り口である扉をノックしようとした時だった。

「……これは」

思わずそう口から漏れた。それは驚きの感情を含んでいた。それもそうだろう。何せ目の前の扉に掛かっている木製のプレートに白いシンプルな字でこう書かれていたのだから。

『Thank you for coming. Do not hesitate. Please feel free to go in』

意味が分からなかった。それはつまり、誰でも勝手に入ってくれと――いや、違う。

俺がここに来るのを分かっていたかのような文だった。
俺は服の中に隠していたホルダーから拳銃を取り出し、そっと扉を引いた。すると何の抵抗もなく、あっさりと扉は空いた。
そして空けるのと同じように、慎重に扉を閉め、警戒しながら周囲を見渡す。
館の中は簡素な造りになっていた。左右に別れた通路と、その間にある大きな階段。恐らくこの三つの道から様々な部屋に繋がっているのだろう。ふと上を見れば、日の光を効率良く取り込む為か大きな窓が幾つも壁に設置されていた。
聞こえる音は外からのなびく木葉の音や、野鳥のさえずりのみ。人の気配など一切感じられなかった。
俺はまず一階を調べようと息を殺しながら慎重に館の中を進んでいく。リビング、キッチン、ダイニングと一つ一つ部屋を調べていくが、何か手掛かりになりそうな物は何一つとして見つからなかった。分かったのは、まるでついさっき掃除をしたのではないかと思ってしまうほど、一つ一つの部屋が綺麗に整頓されており、ホコリっぽさなど一切ないことくらいだった。
そうして慎重に館を調べていたのだが、俺はある部屋に入り、思わず足を止めた。そこは書斎のようだった。今まで見てきた部屋と比べて、小さいながらも机や本棚などの必要最低限な物が一つの空間に凝縮された、特徴的な場所。

では何故俺が思わず足を止めたのか。それはその部屋が他の部屋とは違い、空気がよどみ、汚れていたからである。窓から差し込む日差しのスポットライトが、舞うホコリをキラキラと照らしていた。

更には今までの部屋は気味が悪いほどに一つ一つの物が整理されていたのに比べて、この部屋は机の上に書類が平積みされていたり、本棚から本が出たままになっていたりと、ほとんど清掃されていないように見えた。まるでここだけが取り残され、時が止まっているようだった。

「なぜここだけ……」

思わず言葉が漏れる。俺は呼吸を浅くし、部屋の中に入る。そうして空気を入れ換える為に一つだけある部屋の窓を開けた。外の清々しい空気が一気に部屋へと入り込み、今まで閉じ込められていた空気たちが我先にと外へと飛び出していった。

これで少しはマシになったかと、少し満足気に表情を引き締め、俺はこの部屋の調査をすることにした。まずは一番目に留まった机からと、積み重なった書類の山を横へとずらした時だった。

「これは……写真か？」

どかした書類の影に、写真立てが前のめりに倒れて置いてあった。その写真立ては投げ捨てるように倒れ、その上から化粧を施しているかのようにホコリが覆い被さって

あった。その様はまるで荒野に晒された死骸のようで、見ていてどこか空虚な気持ちにさせられるものだった。

俺は何となくその写真立てを手に取る。すると写真立ては割れるように縦に分離し、そこから一枚の薄い紙のような物が出てきた。俺はそれをつかみ、その紙を見た。そして思わず目を見開く。一瞬、息が止まり、それに応呼するように心拍数が跳ね上がる。

そこに写っていたのは家族写真だった。一組の夫婦に、その子供。一番右には引き締まったスーツを着て、軽く微笑む若い男。どこか力強さと、賢さが合いまった不思議な雰囲気の人物だ。

一番左にはふわりとした赤いドレスを着た、金髪の似合う綺麗な女性。写真越しからも優しさが溢れ、どこかおっとりした様に見える可愛らしい人物だ。

そしてそんな二人の真ん中には彼らの子供と思われる少女が立っていた。その娘は幸せそうに満面の笑みを浮かべてこちらを見つめていた。

俺はその写真をしばらく眺めた後、写真をひっくり返して裏側を見る。そこには三つの名前が記載されていた。きっとそれはこの写真に写っている人物たちの名前なのだろう。

いや、少なくとも俺はそうだと確信していた。何故ならその三つの名前、その一番下にはこう書かれていたのだから。

――峰・理子・リュパン４世

あれからあの部屋を調査してみたが、何か新しい発見をすることはできなかった。ただあの〝理子〟が『峰・理子・リュパン四世』だと言うことしか分からなかった。しかし逆に言えばそれは俺が一番、探し求めていた〝理子〟の正体を知ることができたことに他ならなかった。

二階の全ての部屋を調べ終えた俺は階段を降りて一階に向かった。そして段差を全

て降りきった瞬間、ホルスターから拳銃を抜いた。

――誰かいる。

武偵として培った経験が、いままで磨いてきた能力がそう俺自身に告げていた。危険な気配ではない。しかしどこか不気味なこの家にいる人間と言うだけで警戒すべきなのは間違いなかった。

俺はいつでも引き金を引けるように準備しながら、一階のリビングへとつながる扉、そのドアノブに手を掛けた。耳をすましてみると何かカチャカチャと甲高い音が断続的に聞こえてきた。俺は大きく息を吸い、思考を落ち着かせた。そして意を決して勢い良くドアを開け放った。

「やあ、明くん。久しぶりだね」

俺が扉を開けるタイミングを事前に知っていたかのように、直ぐ様そんな言葉が聞こえてきた。

そしてそれと同時に俺は驚きで目を見開かせる。なぜならそこにいたのは、俺をこの日本に住まわせる原因となった人物だったからだ。

「シャーロック・ホームズ！なぜお前がここに！」

そう。そこにいたのは俺がイギリスにいた頃に出会ったシャーロック・ホームズと名乗る男だった。いや、今ならばこの男が間違いなくシャーロック・ホームズと名乗るだ

けの要素を持っていることを俺は知っている。本人なのかどうかはどうでもいい。俺にとって、この男はシャーロック・ホームズである。その事実は間違いないのだから。

「なぜも何もこの家は私の所有物だからね。家主が自分の家にいてはおかしいかい？」

そこで俺は理解する。シャーロックはきっと知っていたのだ。俺がここに来ることを。だから扉にあのような言葉を書き残したのだろう。

そしてここの家の所有者として記されていた名前は恐らく偽名なのだろう。

「そう。君の推測通りだよ」

シャーロックは俺の心を読んだのか、そんな返答をする。そして、先ほどまで用意していた二つのティーカップを持ってソファーに腰を降ろした。

「取り敢えず座りたまえ。きっと、今の君には私に何か尋ねたいことがあるだろうからね」

尋ねたいこと――確かにそうだ。こいつがこの家の所有者だと言うなら、俺はこいつから聞かなければならないことが幾つかある。

「味は保証するよ」

シャーロックと対面するように俺が座ると、彼はそう言って目の前にあるティーカップを目で指し示した。

俺はその言葉を無視して、鋭い目で目の前の男の顔を凝視した。

「俺は理子がリュパン家の令嬢だと言う証拠を見つけた。いや、今思えばお前に誘導されていたのかもしれないが。ともかく俺の預かっている〝理子〟は〝峰・理子・リュパン四世〟。これに間違いはないか？」

俺が眼を細め、シャーロックに問い詰めるように尋ねると、彼は小さく頷いた。

「正解だよ。彼女は没落したリュパン家の令嬢だった娘だ。彼女の両親が不慮の事態で死亡し、残された理子くんにリュパン家の維持などできるはずもなく、リュパン家はは没落し、歴史から名を消した」

「そしてその後、身寄りの無かった峰理子はルーマニアにいる親族に引き取られた」

「ああ。そう周知されているね」

「だがそれはおかしい」

シャーロックは肯定の言葉を口にするが、俺は目尻に力を込め、目の前の男を睨む。

「俺はここ数日、リュパン家について調べ尽くした。俺の人脈やスキル、ありとあらゆるものを使って。その結果、分かったことがある」

そう。俺は理子がリュパン家の令嬢でないかと疑いはじめてから、リュパン家について調べた。歴史。家族構成。そして没落に至る経緯。そして分かったことがあった。

「ルーマニアにリュパン家の親戚など存在しない。そう、理子は誘拐されたんだ」

俺は自分の推理を口にする。今までに得た情報と、理子が逃げ出したと言う事実に

よって導き出した結論を。
俺の推理を聞いている間、シャーロックは微笑を浮かべていた。まるで何か面白いスポーツの試合を観戦しているかのように、僅かに前のめりになりながら、じっと微動だにせず俺を見つめていた。
「なるほど。筋は通っている。素晴らしい推理だ。しかし、ならなぜその親戚を装った人物は理子くんを誘拐などしたのかな？」
俺は思わず言葉を詰まらせる。理子が誘拐されたと言う結論を導き出したものの、その部分に関してはほとんど何も分からなかったのだ。理子を引き取ったと言う家も調べたが、ここ十年大きな動きはしていなかった。俺から見れば理子を誘拐する前とした後の変化がない。だから俺は何の為に理子を誘拐したのか――その理由を確固たる自信を持って言えなかった。
「……それは分からない。だか考えられる物としては〝情報〟、〝立場〟、何かしらの〝遺産〟だ」
誘拐によって得られるモノを適当に並べたが、俺が考え付くのはこの三つくらいだった。シャーロックは俺の言葉を聞くと、前のめりになっていた姿勢を元に戻し、腰を深く座り直す。
「採点をすると、それらはバツだ」

そしてシャーロックはそう言う。その台詞から推測するに、シャーロックは理子が誘拐された理由を知っているのだろう。

教えてくれてもいいのに――と心の中で悪態をつきつつも、俺はそれを隠すように目の前に置いてあったティーカップを手に取り、それで口元を覆う。喉に熱が通過し、鼻孔に華やかな匂いがこもる。

どのような種類の茶葉を使ったのかは分からないが、少なくとも庶民が手軽に口にするような物を使っていないことだけは分かった。

「お味はどうかな？」

目の前の男は感想を求めてくるが、子供っぽいと思いつつも俺はそれを言うのが癪で、黙ってティーカップを元の位置に戻した。

シャーロックはそんな失礼とも取れる行動に何も言わず、ただ僅かに口角を上げるだけだった。

「君は理子くんから何か預かっているだろう？」

シャーロックは唐突にそんな言葉を口にした。俺はその言葉に疑問符を浮かべる。そんな物などあっただろうかと、ここ数日の記憶を掘り起こす。昨日、理子と別れた所から始まるその発掘作業は、一瞬にして目当ての物を見つけることで終わりを向かえた。

俺は視線を自分の胸元に落とす。そして服の襟元からネックレスのようにして首に掛けていた一つの十字架を取り出した。それは俺が理子と出会った時に、唯一彼女が持っていた物だった。

――これ、帰ってくるまであきらが持ってて。

俺がしばらく家を離れると告げた時に、理由も言わず、理子はこのネックレスを渡してきた。お守りの代わりなのか分からないが、理子があれほど大事にしていた物を俺に預けてくれたことは素直に嬉しかった。

「その十字架のロザリオが君の求めている答えを教えてくれるだろう」

十字架を見つめていると、シャーロックは答案を読み上げる教師のようにそう告げた。

しかし俺は釈然としなかった。どこをどう見てもただの十字架のロザリオだ。何か特別な仕掛けがあるようには見えない。確かに高価に見えはするが、それ以上の感想は特に思い浮かべることはできない。しかしこの男がそう言うのであれば、このロザリオに何かがあるのは確かなのだろう。

「星伽神社と言う神社に行くといい。君が次に向かうべき場所だ。ちなみにキーワードは『色金』だ」

『色金』――聞き覚えのない言葉に俺は眉を潜める。それに星伽神社と言うのも知らな

い神社だ。どうやらまだまだ真相に近づくことはできないらしい。

俺は帰りが長引きそうなことに内心で理子に謝る。

それにしても意外だったのはこの男だ。シャーロックは俺に対し、決定的なヒントを出すことはなかった。あくまで進むべき方向性だけを示してきた。しかし今回は方向に加えて、ゴールに向かう道順まで教えたのだ。一体どう言った風の吹き回しなのかと疑問に思うが、どうせはぐらかされるだけかと俺はグッと言葉を圧し殺し、その代わりとなる言葉を適当に投げ掛けた。

「お前ってできないこととかないのかよ」

「ふむ。まあ色々できるのは確かだね」

「魔法を使えたりしてな」

「できるかもね」

「……マジかよ」

やめだ。こいつと話してたら頭がおかしくなりそうだ。

俺はティーカップの半分ほど残っていた紅茶を一気に飲み干し、そっと立ち上がる。

次に行くべき場所が決まった。シャーロック・ホームズと言う人間は信用できないが、少なくともこいつの持ってくる情報は信用できる。だから俺は素直にこの男の言う場所に行くことにした。

「見送りは？」
「いらん」
　考えるだけで寒気がする。
「それは残念だ。ならその代わりにこれをあげよう」
　シャーロックはそう言って、懐から小綺麗なメモ用紙を渡してきた。それは地図だった。それも手書きで、やたらと丁寧な地図。そしてその地図には二つの場所を繋ぐ赤線が引いてあった。一つは俺の今、住んでいるアパートだ。そしてもう一つは――。
「……港？」
　そう、俺の住んでいるアパートの近くにある寂れた港。どうやら赤線は今の住居からその港にいく為のルートを表しているらしい。更に不思議なことに、港を指し示す場所に、『私はここにいる』と言う意味の分からない一文が添えられていた。俺は「何でこんな物を？」――とシャーロックを睨み付けるが、本人はそれを意にも介していない様子だ。
「いずれ役に立つ。理子君から渡されたロザリオと同じように肌身離さず持っていたまえ。私がそれを渡した意味が解るまでね。場所を覚えたからと言って、それを捨ててはいけないよ」
　話を聞いても意味不明だ。しかしだからと言ってこれ以上この男に言求しても答え

てはくれないだろう。諜報学部（レザド）の経験などなかった俺ではこの男を相手にするのは荷が重すぎる。

俺は受け取ったメモを乱雑にズボンのポケットに突っ込み、部屋を出てそのまま家の外へと続く扉を押し開けた。

外はまだ明るかった。太陽が力強く地上を照らし、雲はそれを邪魔しないようにその脇を流れていく。蝉の鳴き声がけたたましく俺の鼓膜をしつこく叩き、夏だと言うことを主張する。

――理子のやつ、寂しくしてないかな？

空を見上げて俺はそんなことを思う。それと同時に俺は思わず苦笑する。たった一日離れただけだと言うのに、理子の心配をする俺自身の変化に。

俺は空に向けていた視線を前へと向け、歩き始める。一日でも……いや、一秒でも早く理子の元へ戻る為に。